

---

# **真・恋姫†無双-白龍翔天-**

蒼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫十無双 - 白龍翔天 -

### 【NZコード】

N41190

### 【作者名】

蒼

### 【あらすじ】

恋姫たちの世界へ降り立つた『天の御遣い』北郷一刀くんが（  
多分）ハムの人 に行く物語。

内政は（作者が）勉強タイム！

現時点（第10話時点）の登場のオリキャラ……田豫（楓）：文  
官 董白（臘）：武官、董卓の妹

## 「」挨拶

「」挨拶改訂版

皆さん初めまして、龍華と申します。

処女作にて、あたたかく見守ってもらえたと嬉しいです。

「」作品について

・真・恋姫+無双2次創作

・原作未プレイ

・原作知識はマンガ・SSから

・ハムの人（多分）

・プロット無し、行き当たりばったり

・オリキャラ少々

・作者ギャグセンス皆無

・ケータイ投稿につき、文章短くて早い。→長めで遅い更新

・道士出番無し

「」お願い等

- ・誤字脱字は御一報ください
- ・誹謗・中傷は何も生み出しません
- ・文章中において、特定の人物ほか、貶めるような意図はありません
- ・アドバイスなど頂けると泣いて喜びます
- （New!）・更新時は活動報告にて「更新」または「更新予定」のタイトルでお知らせします
- ・以下、追加項目が見つかり次第隨時追加します

## 白龍翔天　修正点

三點リーダの個数を1～2個へと修正  
作者の趣味で「」は三個または六個にしています。ミスではありますのであしからず。

呼び名を姓、字で表記 例）田豫 田国譲  
真名が存在するため名に重きを置かず、初対面の人は姓名で呼ぶ  
親密になれば字、真名と昇格していく

加筆・修正

余計な説明（石鹼など）省略

タイトル変更（第10話石鹼作り 痘病対策）

ひとまとめの会話文については改行はするが間は空けず表記

漢字その他表記を統一

ホウ統 鳳統（本来は「まだれ」+「龍」  
程イク 程旻（「日」の下に「立」  
荀イク 或（本来ははらいの本数が1（2?）本多い  
シ水関 泗水關

「次に文字がつながる際に感嘆符「！？」の後ろに一マス空白を  
追加・修正（文末では空けない

改行後に一マス空白を追加修正

## 「～ど」 「～殿」に変更、統一

主人公一人称「オレ」はカタカナ。漢字の場合は変換ミスです。

数字は基本的に漢用数字表記。一刀は算用数字表記となります。

以下、項目が見つかり次第随時追加します。

本文中で上記の通りになつていかない箇所がありましたらご報告い  
ただけるとありがたいです。

一人ではどうしても見落としができてしましますので……

## 第1話 天の御遣い

「…………い　　おい」

「ん…………」

誰かががオレを揺さぶつている。もう朝なんだろ？……確かに身体が光を感じている。

「おい、大丈夫か？」

心配そうな女性の声……女性？

瞬間、意識が覚醒した。

「え…………」

見れば周りには女性が2人。ええとあの……コスプレ？

「えつと…………どなたでしょ？」

「人に名を尋ねる時にはまず自分から名を言つのが礼儀ではないですか？」

手に槍を持った方が言つ。うん、その通りだな。

「あ…………そうですね。オレは北郷一刀とあります。改めて、そちらは？」

「私は公孫白珪。幽州の太守をしている者だ」

「某は趙子龍と言つ。今は白珪殿の所で客将をしている」

……あり得ない名前と地名　　いや聞いたことは有るんだが  
を聞いた気がする。

「……常山の、趙子龍さんですか？」

「ほう? 某も有名になつたものだ……と言いたいところだが、  
その尋ね方からするとどういふわけでもなさうだ」

彼女の目が訝しげに、オレを見定めるよつこスッと細められた。

「合ひてゐるのか……。今つて後漢の時代ですか?」

「それくらいは常識だと思つが……尊の人物ならそれも致し方無  
かるつ」

伯珪さんと田を合わせ、頷きあう子龍さん。

「尊?」

なんだろうか。不安と期待が入り混じる。

「又聞きだから簡単にだが、天からの遣いがこの乱世に救済の手  
を差しのべる……とな」

まあ、と彼女は一拍置いて続ける。

「」で問答を続けるのも、な。伯珪殿、城へ戻りませんかな?」

「やつとまともに喋れる……ふふふ……うん、では話は城でゆつ  
くり聞こつか。じゃあ馬にてつと、2頭しかいないし後ろに乗つて  
もひづか」

なんだろう、背後から暗いオーラが……気にしない方向でこいつ。  
うん、それがいい。

あ、馬だ。しかも片方は白馬だよ、白馬！ 彼女らに気を取られて全く気付かなかつたけど……つむ美しい。

「私の後ろに乗れ」

ええと、どこに手を置くべきか。とりあえず腰を掴んでおこう。

「ひやつ……！」、「じりじりを掴んでるー！」

「え、落ちないよう腰を掴むべきだと思つたんですけど……駄目でした？」

「いや、腰を掴むのはいいんだが、もう少し下を掴んでくれ！」

「あ、ごめんなさい」

城での問答でわかつたこと。ここはオレの世界で言ひ三國志の世界であり、武将が女性になつてゐることなどだつた。全員かはわからぬが。

考えられるのはタイムスリップかパラレルワールドだが、武将が女性なんだから後者か。

「ふむ、家で寝て起きたらあの場にいたと

「そうですね、しかもスウェット……寝間着に着替えたのこの服になつてましたし」

スウェットと寝間着はイコールじゃないんだけどまあいいだろ？。

しかし、我ながら冷静だな。もう少し取り乱してもいい気もある  
んだけど……実感が湧かないからかも。

「私たちは噂には半信半疑だったんだがな、突然空が暗くなつて  
光に包まれた何かが落ちてきたから急いで向かつたんだ」

「そうだったんですねか……ありがとうございます」

「いや礼なんていいさ。こっちも考えがあつてのことだし」

考えがなければ興味は示さなかつた。そして今巷で噂されるのは  
『天の御遣い』という存在で、民の希望の星。

そこから導き出される答えは……

「考え、ですか……『天の御遣い』の名を使って民の支持を得、  
加えて兵も集まる。つてどこですかね」

「ほう。なかなか鋭い御仁ですね」

「少し考えればわかりますよ。苦しむ民には希望となる存在が必  
要ですから」

うろ覚えだが、中国では皇帝が神とイコール、もしくはニアイコ  
ールだったはず。それなのに『天』の御遣いなどという言葉が  
持て囃されるのだから、王朝の力が衰退し民の信頼を失っているの  
だろう。聞いた話では黄巾賊が各地で暴れまわっているらしいし。

「確かにな。しかし……さつきの話に戻るが未だに信じられない  
な。1800年後の未来で私たちはすっかり有名人の『男性』だと  
いうことを」

「そうです。特に子龍さんは常山の昇り龍、後に西方の益州を中  
心に建国される蜀という国では五虎大将　つまり国内最強の五

武将といふことですね　　の一人として名を馳せますから

「常山の昇り龍か、良い一ひとつ名を聞いたな。今後はそう名乗ることにしよう」

「気に入つて貰えて嬉しいです。それで今後のことなんですが…

…」

これからどうのうに扱われるか、それを聞いたとした時白珪さんは止められる。

「待つた北郷、私は私は！？」

「言つていいんだろうか。……いいか。うんいいな。

「最初の方に袁紹によつて滅ぼされます」

あ、落ち込んだ。

「伯珪殿、それもまた運命ですぞ」

確かにそつなのかも知れない。

「でも……あくまでそれはオレの知つている未来でしかない。オレがこの世界に来た理由……きっとそれはその未来を変えるため。歴史に添つて生きるなら、ここに来た意味が無いですよね」

そう、オレがここに来たのにはきっと意味があるはず。当面の目標はそれを理解すること。

「ですから元気にしてください、白珪さん。あのままだつたら野垂れ死んでたり盗賊に襲われたかもしれないこの命を救つて貰つた恩

義、それに報いたいんです」

だから、

「貴女の元で。知識も身体も総動員して貴女を支えていきましょ  
う。そして……民が安心して日々を送ることの出来る平和な世を」

「北郷……」

「訳も分からずこの地に飛ばされた『天の御遣い』が、この地の  
民のためになりたい、と。北郷殿……いえ、我が主よ。某が貴方の  
刃となり『みち』を切り開いて行きましょうぞ」

「つ！ 子龍さん……ありがと！」

「星、と呼んでくだされ。真名と言つて信を置ける者にのみ預け  
るもの。許しなく真名を呼ぶは殺されても文句は言えない、それほ  
ど神聖な名です」

真名……真の名、か。現代では諱、つまり忌み名に相当するもの  
だろう。この時代には名とは忌み名であるため他人に呼ばせるもの  
ではなかつた。しかし、それと同じかそれ以上に神聖なものなのか  
もしけない。

「……私の真名は白蓮だ。これからよろしくな、北郷」

「一刀、でいいですよ。オレのいた世界には真名という風習はあ  
りません。ですから姓は北郷、名は一刀です」

しいて言つならば一刀は真名にあるのだろうか。親しくない人  
に名前を呼ばれたら不快な思いをするし。

「なら私に敬語はいらないぞ、一刀。堅苦しいのは苦手なんだよ

照れくさそうに白蓮が笑う。

「ん……わかったよ白蓮。それと星は白蓮じゃなくてオレを主と言つてたけど、それでいいの？」

「ええ。我が主と定めるは貴方様だけ。何でもお申し付けください。  
もちろん夜伽も構いませんぞ？」

ふふ、と妖艶に微笑む星はすぐ魅力的だった。

「は、はは……とりあえず一刀、文字の読み書きは？」

「言葉が通じるから大丈夫そうだけど……一応試しておいたほうがいいかな？」

当然漢文、それも白文だらうし。返り点がほしいなあ……

「ん、ならちょっと待つてろ」

読めなきや……勉強かなあ。

「読めなかつた……」

義務教育に高校と11年学んできただけあって多少の文法はわかる。

けど単語の意味が広かつたり、意味は簡単なのに漢字が難しくてわからなかつたりと散々だった。

「星には調練があるから読み書きが出来る侍女、もしくは文官でも付けるよ。うちは人手不足だから侍女にいてくれると助かるんだけどなあ……と、一刀が早く戦力になってくれればもっとありがたいかな」

そんなに足りないのか……早く政務が出来るようになろう。そして現代知識を生かして有能な文官も探そう!

遠い目をする白蓮を見て、そつ、思った。

## 第2話 新たな出会い（前書き）

『天の御遣い』 北郷一刀。

彼は約1800年前の中国にやつて来て、2人の人物、公孫贊と趙雲に出会つただが…なんと2人とも女性であつたのだ。

内心驚愕しつつも自らの使命を感じ、公孫贊陣営に参加することを決めた一刀。

これから彼の人生はどうなつていくのだろうか…

## 第2話 新たな出会い

『天の御遣い』 北郷一刀を拾つてから早1週間。

読み書きを教えている侍女曰く、飲み込みがとても早いとのこと。

そりそろ簡単な政務くらいは任せていいく頃合いだろう。

さて、どういふのやう……？

おっ、あれは……

「星、一刀を見掛けなかつたか？」

「おや白蓮殿。主なら先程から訓練用の剣で素振りをしていましたぞ」

「素振り？ なんでもまた」

「なんでも自分の身くらいは自分で守れるようになりたいと」

うへん……確かにいつも本陣が安全だとは限らないし、陣頭で指揮する方が兵士たちにも良いだろうけど。

「某に余計な心配をさせずに、思う存分力を発揮してほしいとの意味合いも含まれているようですね」

星は貴重な戦力だ、前線で戦つてもらわなくてはならない。

そして『天の御遣い』としての責任感と言つたところだろうか。

「わかった、ありがとつ

「ふう……」

素振りを終えて一息つく。時々星に相手して貰つたが、全く歯が立たない。ところが軽くあしらわれ続ける。

名だたる武将に勝てるとは思わないものの、それでも一撃くらいい『えたい』といつのは剣に心得のある者としての性だらうか。

女性が強い世界だから、恐らく男性一般兵に勝てれば良いところ。実戦経験のないオレにはそれすらも厳しいが。あ、田からも汗が…

…クスン。

「一刀」

「おあつ……白蓮か。どうしたの?」

「ん? 変なやつだな……今に始まつたことじやないけど」

それ地味にキズつくんだナビ。

「わ、悪かつた、だから地面に『の』を書き始めるなつー?」

まあいいや。

「で、何?」

「変わり身速つーいや、今後は少しづつ政務をやつてもいいやつと思つてな

「うーん、いこけど……教えてくれよ?」

「ああ大丈夫だ。文官を1人つけるから、覚えながらで構わない」

文官は皆おカタい……と思つるのは偏見だろつか。

「いつからやればいいの？」

「明日からだ。頼んだぞ？　あ、あと何かしら要望とかがあつたらどんどん伝えてくれ。天の知識を生かした政策とかな

「わかった。白蓮もあんまり根を詰めすぎるなよ？」

「そうできるといいんだがな……じゃ、またな」

白蓮と星に出会った時は名前に驚いて声も出なかつたが……また有名な人なら今度は奇声を発するかもしれない。

心構えだけはしておこう。

翌日。

奇声は出なかつた。けど……また女性なのか、やっぱり。

「そんなに見つめられて、私がどうかしましたか？　ま、まさか一人きりだからといってそんな……いやん」

両頬に手をあて、ふるふると首を横に動かす。

「やるなりそれなりじく照れてください、お願ひします

基本的に無表情で、さつきのセリフもそうだった。

それと教えてくれるのは田豫「でんよ」さん。確か初期に劉備に仕えた人じやなかつたかな。肉親の病とか何とかで去つたと記憶している。

「そうじやなくてですね、えーと……政務つて肩が凝るなあと思いまして」

「慣れればそうでもないと思いますが……そのうち慣れますよ」

そんなものか。ま、これで白蓮の仕事が減るならと思つて頑張ろう。

さてさて、残り少しスパートをかけようか。

政務が終わり息抜きの散歩……ではなく、見回りの仕事つまり視察。

警邏はオレ提案の警備隊が行つてるので、実際は街の市場で活気を見たり、民の声を聞いたり。そこから見えてくる政策もある。

最初は護衛のせいで怖がられていたが、今ではすっかり打ち解けている。

「あーみつかいまだー！」

「いや、他人を指差しちゃいけませんつ。ここにちは御遣い様。

毎日お疲れ様です」

「こんにちは。お元気そうで何よりです。何か困つてることがあつたらいつでも言つて下さいね」

「はい、見回り頑張つて下さいね。失礼します」

「ありがとうございます。お気をつけて」

相変わらず綺麗な人だな……笑顔にドキッとしてしまった。

5歳くらいの子どもを連れているから少なくとも20歳は越えているだろうか。いや、でも昔の日本で15歳で元服だったし……20歳ちょうどとかあり得るな。

いかんいかん呆けてる場合じゃない。続き続きっと。

見回りを終えて城へ戻ったオレに伝えられたのは危急の報。

「……黄巾賊が？」

「ああ、西の外れの邑が襲われているらしい。数は約二百。五百もいれば大丈夫だろうから、早馬で討伐に向かってくれるか？」

くそっ。死人が出ていなければいいが……

それが希望的観測であることがわかつていても、そう思わずにはいられない。

「……わかった。指揮官はオレ一人？」

「星が暇そうにしていたから連れていってやれ」

「了解。よし、すぐに向かうよ」

「酷いな……」

立ち上る黒煙と激しく燃え盛る炎。

血が染み込んだ地面、無造作に転がる死体、鼻をつく異臭。

一つ一つが賊の襲撃を如実に物語つている。

「これが現実です。漢王朝の力は衰退し、州牧や県令たちが私腹を肥やすためだけに課した苛税に苦しむ民が、黄巾となつて他の邑を襲う……そして襲われた邑の人々は困窮し、他の邑を襲う……この悪循環を解決するのが我々上に立つものの使命です」

白蓮殿は良い人物ですが、と星は洩らす。

「……斥候を出して賊の居所を特定する。残りは生存者を探して介抱を頼む」

許せない。賊も、自分の無力さも……

確かに星の言う通り黄巾賊は困窮した農民が主体だろう、しかしだからといって人々を殺して略奪を働くのを許されるわけではない。

「隊長！」

「どうした、賊の住処が見つかったのか！」

「いえ、それはまだです！　が……生存者を発見し、隊長にお会いしたいと！　こちらです！」

生存者がいたか。

「星、ここは頼んだぞ」

「御意」

いたのは3人の女の子。3人とも満身創痍であるが、命に関わる傷はなさそうだ。

1人が歩み出でくる。

「貴方がこの隊の長でしょうか」

「ああ、オレが隊長の……」

名を言おうとしたところを、彼女の後ろの2人によつて遮られた。

「ちよつ、真桜ちゃんやめるの一！」

「放さんかい沙和！」「れだけは言わんと氣がすまんのやつ！

……ホンマにあんたが隊長なんやな？」

鋭い眼差しで睨まれる。咄嗟に目を逸らしたくなる。だけど、逃げるわけにはいかない。

「……ああ、そうだ」

「遅いんや……来るのが遅いんやアンタらつ。ここの人たちはええ人やつた……余所者のウチらでもあたたかく迎え入れてくれた……笑顔で世話をしてくれた……そんな人たちが目の前で死んでいく姿を見た、ウチらの気持ちがわかるかあつ……」

真情の吐露。それに対してもオレは反論する術を持たない。例え持つていたとしても、反論することは無かつただろう。彼女のその眼の端に、光るものを見てしまつたから。

「お、おじ真……いや變成つ……」

「キサマツ……」

激昂する兵士を抑え、前に進み出す。

「他、言いたい」とは

「まだまだあるけど……こつまた賊が来るかもわからぬい状況や、今はこれでええわ」

「そつか。……救援が遅れたこと、その結果民の命を散らしてしまったこと。許してくれとは言わない……本当に済まなかつた」

言い、頭を下げる。

「なつ……！」

「なつ……！」

頭を下げる田の前の男を、私たちは絶句して見つめるしかなかつた。

た。

田のために兵を向け、暴言として斬り捨てて構わないようなハッ当たりに近い真桜の言葉を受け入れ、認め、あまつさえ頭を下げる。そんな誠実な態度。

(信じられない……)

「の気持ちはきっと、真桜や沙和も同じだったはずだ。

それと同時に確信を得た。

「人のような……いや、この人こそがこれから世には必要であり、必ずこの乱世を終焉に導く方だと。

そして、我々が自らの力を捧ぐべき人物である、と。

「真桜」

「……ああ、わかつとる。すまんかった、兄さん。このとおりや」「いや、そつちが頭を下げる必要はないよ。悪いのはこっちなんだから……」

「そんなことないの。助けに来てもらえる」と自体がありがたいの

「その通りです。あなたたちは我々を助けに来て下さいました。  
……これから黄巾賊の討伐に行くのでしたら、是非同行させていただけませんか」

「……君たちは満身創痍だろ？」

返り血と出血、どつちがどつちかわからない程彼女らの服は朱に染められていた。

しかし、この悲惨な光景を生み出した黄巾賊に一矢を報いたいと思つるのは当然であり、その権利がある。

だからこそ。

「……命を大切にしてくれ。人数で勝つていいけど、無理をしないでくれ。その条件が呑めるならば連れていく」

「つ、呑めます」

「ならいいだろう。賊の居所が発見されしだい出陣する。それまでは手当てを受けて休んでいてくれ」

「はい、ありがとうございます……と、話の途中でお名前を聞き損ねていましたね」

「幽州の北郷一刀だ。よろしくね」

「つ！ 貴方がある……私は樂文謙と申します」「李曼成や」「

于文則なの」

魏を支えた武将たちか。女性だがいい加減驚かなくなってきた。

彼女らの力はこれからきっと民の助けになるだろう。

数に利のあるオレたちの敵ではなく、黄巾賊の殲滅は終わった。

そして民を埋め、賊を埋め、今はその墓の前にいる。

「心温かい民たちよ。貴方たちの優しさは、きっと彼女らに伝わった」

村人たちの墓穴を作る際、彼女らが流した涙が何よりの証拠。

「この犠牲は絶対に無駄にしない。あなたたちの死は、この大陸に平和をもたらすための礎となろう」

剣先で手をなぞり、血が墓へと垂れ落ちる。

「血は万物の“生”の連なり。今生で死別しようとも、貴方たちは我々の心の中で永遠に生き続ける。……安らかに眠ってくれ」

簡単な葬儀を終え、帰り支度も終わつたころ。

「北郷様！ 我々を連れていつて下さいませんか」

「……星、彼らの力量はどうだったかな」

「申し分無し、とはまだ言えませんが磨けばまだまだ光るもののがありますな」

その評価について、オレも 他人を評価するような力量はオレにはまだ無いが 同意見だつた。

「そつか。だそうだよ。うちの筆頭武将のお墨付きだ」

「と言ひことは……」

「これからよろしくね

「はいっ！ 今後は凪と及び下せい、隊長！」

「ウチの真名は真桜や。よろしくうな、たいぢゅ」

「沙和は沙和なの。よろしくお願ひしますなの！」

「うん……凪、真桜、沙和。改めてよろしく」

こうしてつらい経験と共に新たな仲間を加え、白蓮のもとへ戻るのであつた。

### 第3話 軍師加入フラグ（前書き）

樂進・凪、李典・真桜、于禁・沙和を新たに陣営に迎えた一刀。

自分ではなく一刀の部下 しかも女の子 が増えたこと  
に人知れず落ち込む白蓮。

そうとは知らず一刀は内政に励むのである…

序盤は内政につき読み飛ばし可

### 第3話 軍師加入フラグ

黄巾賊討伐から2日経ち、オレと星、三羽鳥　　凪・真桜・沙  
和　　は白蓮の私室に集まっていた。

白蓮が言つには、

「古参の将たちが我々新参者への待遇に対する不満を持っている。  
だから何かしら貢献をして認めさせて欲しい」

とのこと。

星はここで武勲を挙げているが、白蓮では無くオレ直属の部下  
尤もオレとしては部下では無く仲間だと思っている　　である  
と公言している。

そしてオレは『天の御遣い』という自分でも胡散臭いと思う肩書きで拾われて来た人間だ。

嵐たちに関しては、実際に戦闘を見ていない奴等に彼女らの力量  
がわかるはずも無く、さらにオレが連れてきたと言つといふにも反  
発する者がいるんだろう。

しかし今は黄巾も幽州ではだが大きな動きは無く、烏桓や匈奴、  
扶余も静かにしているらしいから、暫く戦も無さそうで出番がない。

あつたとしても小規模の黄巾賊の反乱くらいだろう。

喜ばしこゝとなんだけれど。

やつなるとやるゝことは内政面……農商工業の発展や治安の維持・向上などに頼られてくる。

この時代で貴重なのは塩。専売権もあるのだが違法にて、高値で取引されることも少なくない。

民衆に適正価格で行き渡りせることを目標にするなら狙つは塩か

……

幸いにしてこゝ幽州は海に面している。

加えて後に天津となる場所あたりの沿岸では干満の差が激しく、中国大陆有数な塩田も生まれたはずだ。他にも天然ガスや油田なども確かに存在したはずなので、毎日温かいお風呂に入れるかも知れない。

さらに農業用肥料の開発をしようとも思ひ。糞尿や、干鰯、粕なども量産できるだらう。

漁村では捨てられるであるひもの肥料として買い取ることを約束し、代わりに……といつわけではないが塩を精製できる土地を借りる。

そうすればオレたちは塩の収入を得られ、漁村民も利益を得られる。ギブアンドテイクといつやつだ。

商業に関しては治安を向上させねばまずと商人同士のネットワークによって情報も広まり、各地からこりこりして幽州にくるようになる

はず。

ト業においては真桜の加入によつて大きな転換点を迎えた。オレの「つね覚えな知識をも形にするのだから彼女の技術力は計り知れない。」

灌漑用の水路や溜め池、農作業の効率が上昇する用具 千歯  
扱・踏車・千石通し・唐算・備中鍬・etc に鎧など……

成功の曉にはきっと国は富み、栄え、強兵を生み出す。

そして今後互いに勢力を伸ばして隣接する袁紹や曹操にも対抗出来る上、北方民族との交易も期待できるようになる。

なにはともあれ……優先順位は塩。お金がなけりや何も出来ないからな。

鎧くらいは何とかなるだらうから、それだけは白蓮と真桜に話をつけておくか……

黄巾賊を討伐したりしながら、数ヶ月後。

オレは1人頭を抱えていた。

「やべえ……どうしようつ

結果から言おつ。

農業は発達し街は連日の賑わいを見せている。商業においてはなかなかでも塩は余りあるほどで、侠客と呼ばれる人々を通しかなりの量を他国に売った。美髪公関羽も侠客だつたらしいから、いつか会えるかも。それでもまだ沢山ある塩を味噌の製造（塩が材料だとわからなければ専売権も何も関係あるまい）に使つた結果、試行錯誤の末完成し、富裕層に大ウケ。そのお金で鎧も量産し、農具を作り、さらに農業が改良され……

つまり大成功！

なにこの素晴らしいスパイラル。

現代日本では考えられないほどの好景気と歳入である。

白蓮の白馬義従も兵数が倍近くなり、兵士の装備や星たちの武器も新調または改良した。

オレの登場（登場？）から半年で、恐らく袁家にも負けないほどの資産を手に入れこととなつたのであつた。

ついでに、久々に味わつた味噌汁はとても美味しかつたです。

陳留を目指す2人の少女がいた。片方の名を程立、真名を風。もう片方は今は戯志才と名乗つてゐるが 郭嘉、真名を稟と言つ。

彼女らは陳留をもつ田と鼻の先という位置にまで捉えている。

そのため暫しの自由行動時間とこゝりと、宝慧（ ）とこゝりの  
人形を頭に乗せた少女、風は、街一番の書店に来ていた。

「ふむふむ……どれも既読の物ばかりですねー」

「おひ。お嬢ちゃん、ウチの蔵書量で物足りないつてか。ならち  
よつと待つてろ……ええどこに仕舞つたか……あつた！ ほらよ」

渡されたのは『天界語辞典・ぱーじょんわん』と書いてある本。

実は一刀が時々言つ耳慣れぬ言葉を聞いた田豫がそれを詳しく聞  
き出して記憶し、本に纏めたのだ。恐ろしい記憶力である。

当然一刀はこゝのことを知らないが、作者名はしつかり『北郷一刀』  
・『田国譲』となつてているのであつた。

「えと……これは」

「何でもそれは幽州に落ちたつていう『天の御遣い』が書いたや  
つでな、売りもんのほうは売り切れちまつたが……オレも読もうと  
思つて取つておいたんだよ」

「……お気持ちはありがたいのですが、おじさんの物なら受け取  
れないのですよー」

「気にすんなつて！ うちはその本のおかげで随分儲かつたし、  
またすぐに入荷するわ。それに嬢ちゃんみたいな本好きに読まれた  
方が本もありがたいってさあ！」

なんとも氣前の良いオヤジである。

(「それで断るのは些か氣が引けるのです。こゝは好意に甘えてお  
きましょう」)

「……ではありがたく頂戴いたしますのでー」

「おひー、じゃ、また来てくれよなつー」

風は店を後にし、稟との待ち合わせ場所に本を読みながら戻るの  
だった。

「稟ちゃん稟ちゃん、風はこれから行きたいところが出来たので  
すよー」

「……風、陳留まであと少しところでいきなり何を言つて出  
すの?」

「えいえ、と風は首を横にふる。

「稟ちゃんは」のまま曹操をまのむとを訪ねて構わないのです。  
行くのは風だけですよ」

「幽州……確かに最近は治安も良いと聞くけど、道中危険が全く  
無いと言つわけではないのよ?」

そうして2人はにらみ合つ。が、少しして。

「……はあ。わかつたわ。風が一度やう言つ出したら意見は変わ  
らないのはもう身に染みた。だからこいでお別れ……の前に護衛の  
当てだけはちゃんとつけなさい」

「その点については問題無いのですよー。帰り際に見つけた、幽  
州へ向かう旅人みたいな人と話をつけておきました」

「つまり反対されても行くわけだつたと。全く……」

間をおいて稟は再び話しかける。

「……もし戦場で会つたのなら容赦はしないわよ？」

「望むところなのですよー？ 粟ちゃんを打ち負かして曹操さまのお仕置きに追い込んでやるのです」

「そそそ曹操さまのおおおお仕置き…ふはっ」

「あらう……はーい粟ちゃん、トントンしまじょうねー」

（粟ちゃんの鼻血を止めるツボを知っている人がいればいいのですが。いえ、ここはそのツボを紙に記して懐に入れておきましょう。紙は高価ですが粟ちゃんの命の方が大事ですし）

やがて粟は鼻血を止め、2人は握手を交わす。

「達者で、風」

「そちらこそ。ではまだどこかで」

最後まで飄々としたまままで去つて行く風であった。

さてと……あ、いました。

武に心得のあつて尚且つ幽州を目指す人たちがいて良かつたのです。

「お待たせしました」

頼んだ側が遅れてしまつて申し訳ない気持ちでいっぱいなのですよー。

「程立さん、もついいの？」

「ええ。では行きましょうか

張飛ちゃん」

劉備さん、関羽さん、

「ふむふむ……幽州の太守さんは同学の仲で……つまり大志はあるがお金も装備も無いから雇ってくれ。と、いうことですねー？」

「あはは……そんなにはつきりと言わなくても……」

風に痛いところを突かれた桃香　劉備の真名　は顔が若干引き攣っていた。

「と、ところで程立さん！　今軍師を探しているんだけど……軍師として曹操さんのところに行くつもりだつたんでしょ？　うちで働く気はないかなつ」

「風としては『天の御遣い』がどのよくな人か気になるので遠慮をせてもいいのですよー」

風は現実と理想の区別をつけられない人に仕える気はさらさら無いのです。それに……尊の『大徳』が本当ならいざれ良い軍師が見つかるでしょうし。

「御遣いさまがあ……どんな人なんだ。幽州も御遣いさまが来てから活氣付いたって聞くし……」

「百聞は一見に如かず、ですよー？」

と、そこで桃香の義妹である愛紗こと関羽が話し掛けてくる。

「桃香さま、あちらから何者かが向かってきましたので」用心を…  
「あれは賊、でしょうか。鈴々つ！」

「心つ、なのだー！」

ふん、賊など一蹴してくれ……え？

意氣込んだ愛紗だつたが。

「ひええーっ！ もひあの村にや行かねえー？」 「「逃げるー  
ー…」「…」「…」  
「…………えーと？」  
「いやはは、愛紗の顔が怖くて逃げちゃつたのだ」  
「鈴々つー？ ……そんないやまさか、でも。そんなに私の顔は  
怖いか……？」

何事かをブツブツ呟いてくる愛紗を横田に風はしつかりと前を見  
据えていた。

賊さんの様子からすると村人に追い払われたようですね…  
しかし村人単独で戦うなんて危なすぎますし……おおつ、これは  
まさに劉備軍軍師出現ふらぐといひやつてしまふかー？

「とりあえず行つてみよつよー」  
「そ、そうですね。それが良いでしょ」

「わ、私を軍師にしてくだしゃいっ！ はわつー？ また噛んじ  
やつたよう……」

「しゅ、朱里ちゃん頑張つて！ いおむはもひあぐわいだよー」

「うむ……ああ、達成田標の」とですか。むむむ、この子たちも『天界語辞典・ばーじょんわん』を読んでいるとは……

「えーと……どつあえず軍師になりたいんだよね、ねつー？」

「は、はい、お願ひします！」

「ね、良によね、愛紗ちゃん！」

「ええ……ほほ回数の農民で盜賊を破ったのですからむしろから頼んでも良いくらいです」

「や、やつたよ離里ちゃん！」「おめでとつ朱里ちゃん！」

「土元どのは一緒に参らないのかな？」

「はい、私は公孫贊さん……というより北郷さんの元へ行きたいんでしゅ。あわつ」

よく躊躇むのは『属性』付け……といつやつでしょうか。軍體として『ひこぜぬ』が出来てしまいましたが……切磋琢磨するのもいいかもしないのです。

「やつともあれば早く北郷さんのところに行かないとね

残念なことに白蓮ではなく一刀の認識が強い幽州である。

「はつー？ 今何か不名誉なことを言われた気がした……」

「太守様、そんなことより政務を進めてください」

そんなことって……そろそろ泣きやう。

## 第4話 キズナツナイテ（前書き）

曹操に仕えんと陳留を出指していた稟と風。陳留まであと少しといつといひで風は一刀に興味がわく。

幽州へと向かう一行、桃香・愛紗・鈴々と出会い、旅をともにすることだ。

幽州への旅路の途中で桃香は諸葛亮・朱里を軍師として迎え入れる。が、もう1人の少女、鳳統・離里は一刀に興味があるという。

風は『らいばる』心を燃やし、一刀の回りの女性環境は変化を見せるのだった

## 第4話 キズナツナイテ

「はあ……」

思わず溜め息が出るのは仕方がないだらう。

今、一刀のおかげでうちの収入源は確保され、かつてない程国庫は潤っている。

最初は知り合いの侠客　弱きを助け強気をくじく人々

に頼んで塩の密売を行っていた。勿論適正価格以下の値段で、だ。

それに一刀が『味噌』とやらを作ったために、今はそちらの製造にも力をいれている。買うのは富裕層であり、そのため金額を上乗せしているのだが……それでも連日売り切れの人気。

製造方法を明かしていなため、原料に塩が使われていることを証明出来ず、塩の専売権に関わらず堂々と売り出すことが出来る。まあこじつけられたら手も足もない……かもしれない。

いや本題はそれでは無くて。

善政は名聲を高める。もともと『天の御遣い』として有名だった一刀がさらに有名になるわけである。一刀が、だ。大事なことだから2回言つた。

そう、『天の御遣い』が國を奪つ……そんなこと考えている一部の文官たちはどうでもいい。私は一刀を信じているからな。

問題は、だ。一刀の名声が高まる。有能な人物が『一刀』を訪ねてくるつていうことだつ！

先日旧友である桃香が部下を連れてやつてきたのだが……

2人も軍師志望。……一刀の。

うちには軍師という軍師はいなかつたから、喜ばしいことだ。

それに私から見ても2人とも可愛らしい。星然り凪・真桜・沙和然りで、国譲も一刀のことを気に入っているみたいだ。

なんか今胸のあたりにチクッとした痛みが走つたと思つたがうん、気のせいだろう。

「大丈夫ですか、太守さま」

「ん、ああ……気にするな、国譲」

はあ……

今日は政務が早く終わり、視察がてら散歩でもしようかと考えていた矢先だつた。

「白蓮、政務終わつた？」

「あ、ああ……どうした？ 何かあつたのか」

「いや、暇ならデートしない？」

「えと？ 言葉の響きは覚えてるんだが……ええと確か、合い

挽き？ 何を挽くんだ？」

「うう覚えだから言い方がこいつなってしまうがそれはまあしょうがない。

「白蓮それ字が違う……人目を忍ぶ訳じゃ無いけど2人で街に出掛けようつて話だよ」  
「ああ逢い引き……つて逢い引き！？」  
「うん。で、どうするの？」  
「ええと……あの、いや、そのだな」  
「もしかしてオレと2人きりは嫌だった？ はは……」  
「つ！ そんなこと無いぞ！」

声が大きくなつてしまつた。知らず知らずのうちに興奮してしまつていたらしい。

「それなら良かつた。一刻後にここでいいかな」

くみつしょん・その1  
（買い物編）

「どうも、みんなのあいどる風ちゃんですー。

今日はお兄さんが白蓮さんとでえとをするやつなので、細かい仕事をしている最中の田豫さんに経過と結果を報告するために監視……もとい見守つてます。

はてさて、お兄さんの女子に対する扱い方はどれ程のものなのでしょうか？

期待させて貰いましょう。

おつと……動き出しました。

2人で街へ向かいます。護衛の兵隊さんたちはいません。  
いやとなつたらこいつを護衛しているせ……華蝶仮面さんが助けてくれるので安心ですよー？

「それで一刀、何処か行く当りがあるのか？」

「現代なら……ああオレのいた時代なら公園とか遊園地とかなんだろうけど……あ、ならワインドウショッピングにしようか」

「言つてることがわからん」

「あ、『じめん』じめん。主に店を冷やかしたり、買い物したりってことだよ」

「天の言葉は難しいな……」

「慣れると楽なんだけどね。お、小物屋……ひょっと入つてみるか」

華蝶仮面

これでは中の様子がわかりませんから、風も変装  
なんばー2 をしてお店に入ります。

「うむ……やっぱり沢山種類があるなあ

せつかくですから風も物色しておきましょーつか。

「あ、これ可愛いな……」

白蓮さんがねつくれすを見つめています。

地味過ぎます、華美過ぎます。しかし素朴な味わいのある……そんな印象を受けます。白蓮さんらしいことだけ言つておきましょう。

あ、お姉さんこれ……これ……とそれ。あれも下せこ。

代金はお兄さん 『天の御遣い』 のツケでお願いします。

ふふふ、お兄さんが視察と云つ名の散歩に行く度につづいていく風は、既に代金をお兄さんにツケてもいいことができるくらい顔が広いですよー?

あ、2人とも何も買わずに出てきました。

風も慌てて後を追います つと思つたらお兄さんだけ戻つて来ましたが……はて?

先ほど白蓮さんが見てたねつくれすを持つて……ああ、やつこうじですか。お兄さんもなかなかやりますねー。

欲しいと思つていたぶれせんとを貰つて喜ばない女性はないのです。しかもそれが意中の男性からなら尚更のこと。

ただ、白蓮さんはお兄さんへの好意を自覚していなもそつな気がしますが……

それは本人の問題ですし、らこばるをわざわざ増やすほど風は優しくないのです。

それせむじおき、お兄さんを追いかけます。

「女性とこつたらやつぱり……服だろ服。うんうん

次は服屋さんに向かうよつですが……

「メイド服、バースーツ、スク水にセーラー服！ キタコレつ  
……」

お兄さんがいつになく積極的なのが謎なのですよー……？

「バニー……は星だな。凪は犬耳、いや耳だけじゃなく尻尾も付けるか。沙和は……ボンテージ姿で調練させてみようか。真桜は水着みたいな服装だから新調してあげようか。ビキニかな？ 国譲さんのエプロン姿とか見てみたいなあ。かなり似合いそうだ……あ、ならメイド服でも？ ナース服でもよさそうだ。国譲さんの似合う服の範囲は広いなあ。問題は風と離里のどちらにスク水を、どちらに幼稚園児服＋ランドセルを着せるか、だ。異論は断じて認めん。白蓮は……うーん、セーラー？」

「おつ、おい一刀……？」

「あー妄想が止まらん！ よし、早く行くぞ白蓮……」

「え？ ちょっと、まつ……うわあああー！？」

白蓮さんが為す術も無く引き摺られてこきます。

「……おつちゃん……オレがこれから提示するもの……作れるか？ 金に糸田はつけない。これなんだけど」

「うん？ こつ……これはつー！」

「出来るかな」

「出来ますともー。こやむしろやらせてくだせえ！ それに代金もいりやせんがー！」この絵のおかげで創作意欲が湧いてきやしたつ

「そうか……任せたぞ、おっちゃん」

「ええ、勿論ー」

ガシツ、と堅い握手を交わした後、抱き合つて互いの肩を叩き合つう2人。…………離里ちゃんと孔明ちゃんが喜びわざな構図ですねー。

話も纏まり、お兄さんは白蓮さんのもとへ。

「一刀、これなんかどうかな」

「おおー、何を着ても着こなせるなあ白蓮は」

「それは私が普通だといひ、……」

「違う違う！ 普通に……じゃ無くてちやんと似合つてゐる、ってこと。ってか逆にどんな服でも似合つて凄いよね」

「それもそうだな」

着ている服から受ける印象といつものがありますが、白蓮さんの場合はより強くその印象を引き立てると言いますか服に着られてると言いますか……

いえあまり触れないとおきましょつ。

さて服も買い終え、次は昼食のようですね。

くみつしょん・その2  
～食事編～

気付けばもう既に昼食時。道理でお腹も空くはずです。

……風は別に餡だけで生きている訳ではありませんよー？

「富裕層がお金を使えば巡りが良くなるつづね」

おおひ、高級料理店ですねー。

「か、一刀、私でもこんな店入ったこと無いぞ」

「大丈夫大丈夫、こここの店主と知り合いだし、個室を予約してあるよ。さ、行こう。ほんにちはー」

「あら……御遣いわま。こちらへどうぞ」

ひづらの店主は餡作りにも携わっていて、風は得意様なのです。

この店はお兄さんから大量に味噌を仕入れて新しい料理を続々と開発しているため、お兄さんとはお知り合いなのだそうですよー？

お兄さんにとっても店主さんを良い人であると認識していて、味噌を安く売っているそうです。

戻ってきた店主さんに風のこと話をします。

「お2人のご様子……ですか。わかりました」

さて、風もこの時間を利用して墨ちゃんと食事して来ましょー。

ふむふむ……つまり2人はイチャイチャしていたと。

「端的に言えば、ですけどね」

ありがとうございました。

……今後お兄さんへの対応を改める必要があつそうですねー。

食事の後は散歩のよつですが……城から出るのですか。お兄さんは星ちゃんに気付いていたよつです。

星ちゃんはこりんな意味で田立ちますから、しうがないのよつ。

「では星ちゃん、行きましょつか」

「風、何か失礼なことを考えていいなかつたか?」

「いえいえ、星ちゃんは華蝶仮面だなーと思いまして」

正直言つて變、といつ意味ですが。

「む、当たり前だわ。風にもよつやく華蝶仮面の良さが伝わつたよつだな」

褒め言葉ととられたよつねー。そつこうしておきまつよつ。

城を出て向かつたのは、河原。森に囲まれ、ひんやりと澄んだ空気が心地良い。

「こんなキレイな場所があつたんだな……」  
「街の人教えてもらつてね」

「民の声、か」

城に、政務室に籠つてゐるだけではわからない」とは沢山ある。

「……なあ白蓮」

「ん? なんだ?」

「オレは白蓮が好きだよ」

そうか。

「……つてええええええ!?」

「白蓮はオレのこじとじつ思つてゐる?」

「えつ? ……わつ、私は」

「うなんだ。一刀は鍛練も頑張つてゐし文字を学んで政務を頑張つてくれてるし……いや違う、そんかことを聞いているんじゃない!」

一刀は優しくて格好良くて……鍛練の理由が守られるだけじゃ無くて守りたいからだと星から聞いた時はどこか嬉しかった自分がいた。

そして一刀を慕う女が増えて……ああ、なんだ。あの時感じた痛みは氣のせいなんかじゃなかつたんだ。

「うん……わ、私も一刀のことが……すすすす、好きだつ」

一刀は白蓮が何か悩んでいることを田豫から聞いていた。ボーッとしてたり、落ち込んだり。

ボーッとしてる時に考えていたのだろうが、それが口に出ていたようでそれを国譲さんから告げられた時恥ずかしい思いをしたけど、嬉しかった。

「ありがとう。嬉しいよ」

「一刀……んつ！？ んん……ふあ」

「良かつたですな、白蓮殿」

「うん……へつ？」

現れたのは星と風。彼女たちは一部始終をしつかりと田に焼き付けていたようだった。

「せ、星！ それに風も！？ 一刀お……つて驚いてない」

「ごめん、知つてた」

「え……」

城にいたはずの星がメンマを見定めているのに一刀は気付いていた。

護衛の兵士をつけてないのでから、星がついているんだろう

う。

そう検討をつけ、城を出ることに決めたのだった。

「まあまあ、白蓮殿も女だということですね。で、主。好きなのは白蓮殿だけなのですかね？」

「はは、星も風も……みんな好きだよ」

告白直後にいつ戻るところが、一刀が種馬足り得る所以だろう。

「……ま、良いさ。自分の気持ちに気付けたんだから」

「おおっ、白蓮さんが大人の女になってしまったのですよー」

「ははは。それじゃ白蓮、星と風と一緒に戻ろうか」

「風はお先に失礼するのですよー」

「では某は風たちにこのことを話してきましょうか」

そう言い、一刀と白蓮を残して去る2人。

「一刀……」

「これからも皆で頑張つていこう。な?」

「……そうだな!」

2人は笑顔で城に戻るのだった。

城内。

風は田豫の私室にいた。

「……そうですか。わかりました」

「国譲さんも女の顔になりましたねー。ふふつ、風も負けてられないのですよ?」

一刀の知らないところで、彼を慕う女性たちによるアプローチが始まろうとしていた

## 第5話 反董卓連合・序章（前書き）

白蓮との仲を深めた一刀。

水面下では女の争いが勃発しているが一刀は気付かない。

しかしながら田々もくは続かないのであつた…

## 第5話 反董卓連合・序章

主だつた將が集まり、軍議が行われていた。

「……やつと重い腰を上げたか」

思わずそう呟いてしまつ。

「対応が遅すぎますな」

星がそう言つのも無理は無い。

中央、つまり漢王朝からの指令。それは、各地に蔓延る黄巾賊を討伐せよ といつものだった。

「名を上げる絶好の機会か……」

「戦いではなく一刀みたいに善政で名を上げるような世ならいのに……」

「せやけど大将、仕方ないやろ」

嵐・沙和は、オレの部下 と本人は言つている である

星の副官という扱いになるため出席していない。

真桜は攻城兵器その他の成果を報告するため出席している。

「ああ……今私たちがやれることを精一杯やひつ」

なんて話をしていたのは数ヶ月前。

鎧を導入したがまだ秘密兵器としておこじうといふ見解が一致、騎馬兵の中から鎧無しでも馬を扱える選りすぐりの兵と、オレ加入以前 つまり鎧導入前の白馬義従を率いて出陣。

野戦ではうちの軍の機動力・破壊力に賊如きが敵うはずもなく、粉碎。

攻城戦で曹操軍に手柄を取られたとは言え、間違いなく誇るべき戦果を上げた。

張三姉妹は曹操軍が討ち取つたと聞いている……だが、信じてはいない。

直属の密偵によれば張三姉妹は元々ただの旅芸人だつたらしく、いわゆるファンの肥大化に乗じて乱を画策した者たちが今回の戦の首謀者というわけだ。

しかし余計な加入があつたとはいえ数万の人々を集めた力  
歌唱力は凄まじい。

人材好きと言われている曹操だ、それを有効活用しないほうがおかしいのである。それに、黄巾党に参加せずとも張三姉妹を好きだつた者たちもいるだろうから、余計な反感を買いたくないはずだ。

これから恐らく曹操陣営からの檄文によつて反董卓連合軍が形成されるはず。書いたのは陳……宮？ 陳琳？ 陳羣？ うろ覚えな上読んだのは演義だけだから信憑性は薄いが。

機会が有ればカマをかけてみるか……いや、何の利益も無いか。  
確証無しではどうにもならないしな。

経済力・軍事力・求心力が高まつた今必要なのは、情報収集力。

白蓮の知り合いで、侠客ネットワークを担当にする訳にもいかない。

今は優秀な諜報部隊の育成が急務である。

「ふう……」

目が疲れたらしちょっと休憩するか。

「ふう……」

また溜め息をついてしまつたが……うん、しょうがないしょうがない。

リラックスを兼ねて浴場へ来ている。

蒸し風呂では無く、現代的な大浴場である。

真桜のおかげで、じつじつとゆっくり風呂に浸かることができる。

ビバ、天然ガス。ビバ、油田。そしてビバ、真桜！

まだ試作段階くらいなため、設置は城のみだが……もう少し経てば街にも公衆浴場を開けるだろう。温泉を掘り当てられれば一番い

いんだけどなあ……そんな時間的余裕はないし。

化石燃料から放出されるエネルギーは莫大で、ほんの少しの燃料から得られる熱エネルギーにより湯を温めている。

電気は作り出せるだらうがそれを使うものがまだ無いため保留。燃料についてはこれくらいなら後世にも影響はあまりないのではないか。どうつか。

何はともあれ毎日風呂に入れるというのは現代人にとって至福である……

「あ、あ、一……気持ちいいなー」

やー、おつかれことか言わない。

と、そこへ。

「御遺い様、太守様がお呼びでござります」

「ん……急ぎ?」

「はい、出来る限り早急にとのことでした」

「……了解しました」

おひおち風呂に浸かってもいられないとは。

湯船から上がり、タオルで身体を軽く拭く。

なんで手触りが何一つ現代と変わらないタオルがあるんだろう……と思ったが、そもそもここがオレの知っている歴史では無いのだ

かりと納得するに至った。

わざわざ浴室に出て白蓮のところに回かづか……

「風呂上がりの牛乳でもあればいいんだナビなあ」

「牛乳、ですか」

「うん、牛乳…………は？ って国譲さんなぜここにいる？」

そしてじつと見ないでくだけこつ！？」

「いえ、私が伝えに来ましたので。それに殿方の身体とはほんまに似ているのですね」

確かに中からは声を判別しづらいからそれはいいとして。じつと見られるのは恥ずかしい。そして国譲さんが少し頬を染めていることに気づき、無表情だけど感情はしっかりあるんだなと、改めて確認した。

「太守様や子龍様には既にお見せになつてござりしゃるのによろしいのではないかと思いまして」

「ふつ……」

あれが。「昨晩はお楽しみでしたね」とこういふとしますね。わかります。

「…………」といふとこんな話している場合じやなかつたー。

すぐさま服を着て白蓮のもとへ向かつたのだった。

「そうだ。董卓が洛陽を牛耳り、好き勝手やつていいんじゃない」

「それで袁紹からの手紙、と……」

曹操ではなかつたか。それはどうでもいいんだが。

「きな臭いな……」

「一刀もやつぱり?」

「ああ。暴虐を以くし民を徒に苦しめていると書いてはあるが……特に根拠は無いしな。董卓は西涼の出だよな? 名門の袁家を差し置いて田舎者が重用されている」とへの嫉妬……みたいな感じのは無いかな」

嫉妬から生まれる事件なんていくらでもあるしな。

「…………心当たりが有りすぎて怖い」

……どれだけ単純バカなんだろ?、袁紹。

そして白蓮の表情がすごいたまれない。

「ま、利用させてもらおうよ。董卓側に勝ち目はほぼ無い。だから連合側で戦功を上げて、もし洛陽が何も無ければ保護。そんな感じかな」

「それだと虎牢関を先頭で破らなければいけませんねー」

「虎牢関……いやな予感が」

「あわ……絶対に抜かれてはいけない難攻不落絶対無敵七転八起虎牢関には恐らく呪布を。シ水関には華雄に加え抑えに張遼が配置されると思いましゅつ。あう」

なんか四字熟語がいっぱい並んでるよ。加えて、将たちの特徴も

## 四字熟語。

彼女ら またもや女性 の情報は既に伝わっている。

一騎当千の呂布、知勇兼備の将・張遼、猪武者の華雄。

1人だけ四字熟語じゃないのは気のせいだろ？。うん、気のせいだ。

「正直、星ですら呂布の相手になるかどうか……」  
「む、主。それは聞き捨てなりませんな」  
「そこらへんは戦場で自分の目で確認してくれ」  
「む、う……」

そのまま軍議はお開きとなり、時が流れ、公孫の旗を持つ軍勢は洛陽に向け出立した。

## 第6話 反董卓連合・序章・続（前書き）

袁紹の檄文に応じ、反董卓連合への参加を決めた幽州軍。

彼らは洛陽近くの合流地点へ出立するのだが……？

## 第6話 反董卓連合・序章・続

オレたちが合流地点に着いた時、連合軍の主要人物による軍議が行われていた。

袁紹、袁術、孫策、曹操、馬騰の名代として馬超。

いずれも後世に名を残した英雄ばかりである…… のだが。やっぱりみんな女の子だった。

いやオレとしてはむさい男どもに囮まれているよりよっぽど良いから大歓迎なんだけどね。

「天の御遣いというわりに随分と貧相な顔ですね」

おい、天の御遣いと顔は関係ないだろ？

みな『天の御遣い』に興味津々といった様子で、天幕に入り名乗つてからと言うもの常に視線を浴びているという状況である。

それはともかく…… 総大将が決まつているのは何故だろう。別にオレたちを待っていたわけでもあるまい。

(白蓮、なんであんなあからさまにアピ……自己主張してる袁紹を誰も総大将に推薦しないんだ?)

(推薦には責任がつきまとうからな。もし、もしの話だが、総大将が使えなかつた時のためだよ)

つまり正直袁紹は使えないと言いたいんですね……いや、期待出

来ないと言つた方が正しいか。

(それに……)

(ん?)

まだ何があるのだろうか。

(……あいつを推薦するのってなんか腹が立つと思わないか?)

(ああ……)

納得してしまった。

確かに高飛車お嬢様系金髪縦ロールを推薦するためだけに血ちりの精神力を費やす必要なんて無いな。

現に曹操はわざわざ腕を組んで不機嫌そうな表情をしているし。

袁術はどう見ても子供でしかも寝てるし。

馬超と孫策はこっちばかり見てるし。

しかし……係累は無いと言えば無いからな、オレが袁紹を推すべきか?

(やつをひと終わらせよ。オレが推薦するよ)

(……悪いな一刀)

よし、じゃあ

「すみません、遅れちゃいましたっ」

出鼻をくじかれたつ……！

「平原から来ました劉玄徳です」

「おつ。遅かつたな、桃香」

「あ、パイパイちゃん それに御遣い様も…」

「白蓮だつ！」

「いつになつたら白蓮と呼んでもらえるんだろ？……

きつとやう思つてゐるな。

初めて桃香に会つた時もこんな掛け合ひをしていたことが思い出される。

白蓮の同学の友人、劉備を始めとする人々が幽州を訪れていた。

「桃香、よく來たな！」

「パイパイちゃん久しぶり」

「白・蓮だつ！」

「あはは、「めん」「めん。といひでお願いがあつてきたの。私たちを雇つて貰えないかな？」

雇つ、か。

「話は聞いている。簡単に言えばお金が無いんだろ？ こいつ言つちやなんだけど装備もかなりボロいし正直ひどいな……一刀、いい

よな?」

やつぱり白蓮って善人だなあ……オレとしては関羽・張飛が戦力に加わるのだから構わない。

と言うかオレに聞くな太守。貴女の問題です。

まあうちは天下統一なんて野心は無い。民が平和に、そして田々の生活に困るような暮らしをしていない限りは統治下に置く気はさらさらがない。

基本は専守防衛。幽州の秩序を乱すやつらにはそれ相応の対応をするまでだ。

今後自立するのだろうが、白蓮との関係、そしてオレたちと彼女らの理想を鑑みるに、恐らくお互い乱世で生き残つても戦うことはないだろう。

むしろ幽州からでは遠隔地になつてしまふ地域 蜀との交易はかなり魅力的だし、より多くの民を助けられる。

なら出立する際にはいろいろ支援してあげようかな。

うーん。我ながら優しすぎる。劉備から発せられる雰囲気がそぞれせるのだろうか。

「白蓮ちゃん……えっと、その人は?」

「ああ、こいつは北郷一刀。内政から軍事まで幅広く私を助けてくれる『天の御遣い』で、その……わ、私の恋人だ」

そんなに照れくさそうに言わると「ちも恥ずかしくなつてく  
る。

「この人が御遣いさま……え！？ 恋人！？」

「白蓮殿、『私の』ではなく『私たちの』ですぞ？ ああ劉備殿、  
某は趙子龍と申す者。以後お見知りおきを」

「……えーと、とりあえず後ろの方々を教えてもらえますか」

話題を変える。「ゲテナイヨ？」

「あつ、はい。向かつて左から関羽、張飛、諸葛亮です。諸葛亮  
の隣にいるのは鳳統ぢやんと程呈ぢやんで、彼女らは御遣いさまに  
仕えたいらしいので仲間ではありません」

関羽は美髯公ではなく女性だから艶やかな黒髪なのか。さながら  
美髯公と言つたところ。

張飛は武器でわかつた。蛇矛がすく立つ。

関羽は良いとして……張飛・諸葛亮・鳳統・程呈（190センチ  
オーバーの大男のはずがどうしてこうなつた）はどう見ても幼女で  
す、本当にありがとうございました。

しかし鳳統と程呈がオレに仕えたいと？ 有名になつたもんだな  
あ。

「程仲徳と申します。風と呼んでください」

「鳳士元です。離里と呼んでください」

なんて感じに。

あの後愛紗と星が仕合いしたりオレが武を鍛えて貰つたりしたのだが……それらが語られることは無いだろ？

今までオレが行つた政策が評価されたのだろうか、桃香・愛紗・鈴々・朱里に真名を預けてもらつまでになつた。

そして黄巾賊討伐戦での活躍が評価され、桃香たちはオレが渡した物資とともに平原へ去つていつた。

ちなみに白蓮は鎮東將軍の地位と“正式な”幽州太守としての地位を貰つている。

今まではあくまで前任者の代わり。あまりにも中央からの干渉が無さすぎて、さらに治安が酷すぎて耐えられなくて、そのまま太守として居座つていたらしい。

よくある話だ。

あと、どうでも良いけど白蓮に近しい侠客筆頭は簡雍さんだそう。白蓮と桃香の話に出てきたのを聞いた。

しかし簡雍といえば最初期からずっと劉備に従つていたはずなのが。

朱里や雛里 諸葛亮や鳳統 と会つ時期もおかしいし……  
だがこんな疑問も今さらか。

何はともあれ。

「久しぶり、桃香。それより御遣いたまはやめてって言つただろ  
?」

「なら一刀さん? なんか新婚さんみたい……」

いやいや劉備さん類を赤く染めないでください。可愛い。はつ、  
デジヤブ!?

「ちょっとあなたたち私を差し置いて何を」ひひゅひひゅと話して  
ますの!?

「あ、総大將は袁紹で良いんじやない? 推薦します」

「そこまで言われれば仕方ありませんわね! この私が総大將になつて差し上げますわ おーほっほっほ!..」

やりたかったくせに。

総大將が決まったのを期に、

「決ましたよだから先に失礼するわ。行くわよ春蘭、秋蘭」「  
はつ」「は

曹操が、

「めりん私たちも戻るつか」「……そつだな」「じゃねつ、  
天の御遣いさん」

孫策が、

「あたしたちも帰るぞ」 「あーんお姉さま、蒲英公疲れて歩けない」「嘘言つな！」

馬超が、

「ハニゅう……七乃お、終わったのかえ？」 「終わりましたよお嬢様」 「ならこんなところに用は無いのじゃ。さつむと帰つて蜂蜜水を飲むのじゃー！」 「はーい」

袁術が、続々と去つていぐ。残つたのはうちと桃香たちのみ。

「オレたちも戻ろうか……」

「……うん」

桃香も連合内の関係に気付いたようだつた。

自陣に戻り桃香たちと談笑してから少し経ち、曹操が訪ねてきた。

「邪魔するわ」

「はいはーい……つて曹操さん？ あの……うちの大将は劉備のところに行つていていいんですけど……」

「構わないわよ。むしろ好都合。私が用があるのは貴方だから。それとさつきは助かつたわ……」

さつき？ ……ああ総大将のくだりか。つてオレに用？ 何でまた。

「わからぬいって顔してるわね……貴方、自分がどれだけ幽州に

貢献してゐるかわかつてゐるの?」

「いえ……」

「稀代の軍師が私から貴方に鞍替えするへりじよ」

風か離里だが……朱里と離里には来る途中で会つたつて言つてたし、風とは陳留近くで会つたつて言つてたし。

なら風か。でも……

「うーん?」

実感ないなあ。

「それに貴方の打ち出した政策がいく功を奏して幽州の治安や農商業は急激に成長したそつじやない。それに貴方の本は読ませて貰つたわ。続きを読む楽しみにしてるわね」

それについては国譲さんにてまつてください、なんて言えるはずもない。

「どうあえず单刀直入に言つね。貴方、うちに来なさい」

「…………はっ!」

「貴方は民を助けたいとらしげけど、出来る限り戦わず話し合いで片付けたいと思っている劉備と違つて現実主義者。それならば私の霸道にその力を貸しなさい」

なんとこいつ上から田線。

「……お断りします」

「それは何故?」

「幽州は居心地が良い。それに大事な人たちを見捨てては行けませんから」

「その大事な人たちを守るために他の民はどうなつてもいいと？」

「そうではありません。困っている人々がいれば駆けつけますし、志を同じくする劉備たちが幽州から遠い地方を救つてくれるはずです。それに……他の場所も孫策さんや曹操さんが善政を敷けば問題ないでしょ？」

「何故袁紹でなく私たちを、袁術ではなく孫策を挙げたのかしら？」

「人の使い方、地の利、時の見定め、において曹操さんは袁紹さんに全て勝っています。袁術さんは、虎の子を飼えるはずもない」

「……ふうん。それを聞いてますます貴方が欲しくなつたわ。けど今日はこれで失礼するわね。ただし、私は欲しいと思ったものは全て手にいれる。それを覚えておきなさい」

言い残して身を翻す。

「……幽州の地を徒に乱すものにはそれ相応の代償を払つて頂きますので」

「……ふふっ」

心底面白い、といった表情で笑つてから去つていいく。

「……ふう～」

やつぱり英雄は纏つている雰囲気が違つたなあ……

白蓮にもそれくらいのオーラを発せられるよくなつて貰わない  
と。

## 第7話 反董卓連合・破軍（前書き）

総大将・袁紹を筆頭に泗水関に駒を進めた連合軍。

編成についての簡易表は以下の通りである。

総大將	袁紹
前軍	劉備軍
中軍	袁紹軍
左翼	馬超軍
右翼	公孫贊軍
後軍	袁術軍
遊撃	曹操軍・孫策隊

攻撃力のある孫策らは別動隊扱いとなつてゐる。

## 第7話 反董卓連合・破章

泗水関の守将は華雄・張遼。

朱里曰く華雄は自分の武に絶対的な自信を抱いているため、挑発して釣り出す予定らしい。

援軍も望めない董卓軍が打つて出るとは思わないのだが……

華雄相手なら必ず成功すると。

こぞとなつたら、華雄を打ちのめしたことのある孫堅を母に持つ孫策に頼むそうだ。

出来れば孫策の出番無く桃香たちに戦つて貰いたいが……オレたちにはオレたちの役割がある。

結果を祈るしかないか。

「伝令！ 前曲の部隊が敵軍との交戦圏内に入りました！」

開戦間近だな……

無論ここからも関は見える。

相手が打つて出て来たらいよいよ左右騎馬軍の出番だ。

「て、敵將軍が関から出てきました！」

「……ホントだ」

単純なんだなあ、華雄。

ん……華雄と対峙するのは愛紗か。

ともに歴史に名を残す 残念ながら序盤で華雄は消えるが  
武将の対決である。愛紗の実力は知っているけど、どんな闘い  
になるか見物だな。

ふむ……一見すると愛紗が押し込まれているようだが……？

お。押し返し始めた。

「ふう……雑魚の相手に手加減するのも骨が折れるな」

あからさまな挑発。しかし相手は乗ってきた。

「キサマ……！ 我が大斧の鋒にしてくれるわっ！」

他愛もない……いつも簡単に挑発に乗るとほ。だが裏を返せばそ  
れだけ自らの武に自信があるということ。

実際、手加減はあくまで口上のもの。相手が冷静ならば良い勝負  
となつただろ。……それでも私は勝つが。

「うおおおおおおおおーー！」

「ふつ、怒りで曇つた太刀筋など容易く読める……はああああ  
！」

渾身の一撃。

決着は、一瞬。崩れ落ちる華雄の身体がそこにはあった。

「命までは取らないが……敵将華雄、劉備が一の家臣、關雲長が捕らえたり！」

さて、あとは……

「よし今だ、突撃ッ！」

白蓮の号令とともに幽州軍が突撃を開始する。

特に白蓮を先頭に先陣を切つて走る白馬義従は壯觀で、かつ美しい。

と、同時に馬超軍も動き出す。

「うわ……」

猛将・華雄の部隊をやすやすと蹴散らしていく。

流石西涼騎馬隊、白馬義従に勝るとも劣らない破壊力である。

「我らも遅れをとるなッ！」

「 「 「 おおおおおーー. 」 」 」

将を失つた部隊などものの数で無く、泗水関攻略戦は早々に幕を下ろしたのだった。

泗水関を占領した連合軍は、虎牢関での戦いに向けて英氣を養つていた。

その中で幽州軍はと言つと。

「ちよつ……一刀それはまずいつて主に私の武的な意味でつー? ？」

「んー? 大丈夫だよ」

「なんだよその自信は……」

「ふん……さつさと殺すがいい」

元気だなあ。何か良いことがあつたのかい?

いやそんなメメしいネタはいい。

「殺す気はないよ、華雄さん」

彼女を縛る繩を外す。

「……キサマらの武では徒手空拳の私ですら抑えられんぞ? 」

ありあ。やつぱり一流の武人には力量差が手にとるよつてわかるのか。

「自らの武に自信を持つ貴女だ、生かされて捕らえられて放され  
て……おめおめと逃げ帰るようなことはしないだろ?」

「……ふん」

「で、だ。繩を解いたのは対等に話をしたかったから」

「私の主は董卓さまのみだ。キサマに降る気は無い」

だろうな。簡単に降るような人間なら捕らえさせず愛紗に任せていただろう。

「うん、構わないよ。だけど1つ良い? 貴女の主人である董卓は、民のために何をしたいか言つてなかつたかな」

「……苦しむ人々を少しでも減らしたいと」

白蓮から袁紹の人柄を聞いてはいたが、やはり董卓は無実なのか  
も知れない。

出世を妬んだ袁紹の仕業か、宦官ども  
しているのはこの世界も変わらないらしい  
か、或いは両方か。

「そんなことを言う人間である董卓が、洛陽で暴虐の限りを尽く  
していると袁紹の檄文にあつたが?」

「あれは宦官どもがツ!..」

やはりな。

「なら洛陽に入つたら董卓の保護が最優先だ。馬超、桃香たちに  
も伝えよう。いいよね? 白蓮」

「ああ、勿論だ」

「なつ……それならば賈駆も助けてやつてくれ。董卓をまといつも一緒にいるからすぐわかるだろう。他の奴らは武人だ、保護は必要無い」

「良いだろう。伝えておく」

袁紹が意図的に虚偽の情報を流したのか、宦官のせいだと本当に知らなかつたのか。

後者の可能性が高そうなのがある意味で怖いけど。

「……それはそつと、さつき貴女はさつと殺せと言つたな？」

それは間違つている。

「貴女には多くの人々を救える力がある」

少なくとも武においてオレに到底出来ないことがきっと出来る。

「主君への忠義？ 甘つたれんなよ。それを理由に貴女が死を望んだら、救われるはずだった命が失われるんだ。……貴女の主はそんなことを望むのか！？」

「……それは」

「オレに、白蓮に仕えなくたつて別に良い。各地を放浪すれば良い。むしろそのほうが多くの人々が救われるだろう。顔がバレるのが気掛かりなら仮面ででも隠せば良い、名前だつて変えれば良い」

幸いうちには仮面の予備がある……幸い、か？

「……しかし私は関羽に負けたのだぞ」

「そうだ、それは事実。だが大事なのはそこじゃない……負けを認め、自分の欠点・短所を見つけ、次を見据えて努力しろ。命さえあれば何回負けたって良い、負ける度に次は負けないと屈辱を糧にして武を磨け。それが民を救う力となるんだ」

「……」

「貴女はオレや白蓮とは違う。オレや白蓮個人に貴女のよつな武は無い。だからこそ貴女に頼んでいる。……偉そうなことを言つて悪かった」

「言つべきことはもう無い。あとは本人がどうしたいか、それだけだ。

「……フッ。おかしなヤツだ……だが、良いヤツでもある。良いだろう、私の力を貸そう。私には真名が無い、だから私のことは華と呼べ。それが董卓さまたちのところにいた時の愛称だ」

「ありがとう、華。北郷一刀だ。一刀って呼んでくれ」

「ああ。よろしくな、一刀」

これにて一件落着かな？

「また一刀の周りに女が……」

白蓮が何か呟いている。けど小さくて聞こえん……

「何を勘違いしているかは知らんが公孫賛、私は旅に出るぞ。武を磨き民を救うための旅を、な」

華には聞き取れたみたいだが……武人は耳も良いのか？ それとも女性同士だからだろうか。

「本当かっ！ いや、流石にこれ以上増えるのは不味いと思つてたんだ。あ、私のことは白蓮で良い」

さつきまでビビってた白蓮がもう華と打ち解けてるのは……すじい変わり身の速さだ。

「白蓮、お前も苦労してるんだな……」

「ああ……主に心労だ」

なんか盛り上がり始めたんだけビ。

「あー……盛り上がりつてると」ひ悪いんだけビ、とうあえず華はこの戦が終わるまでうしぐで身を隠してて。誰かに見つかると面倒だし

「ん？ ああ、わかつた」

今度こそ一件落着かな。しかし終始緊張してて膝がガクガクだ……

最後まで締まらないなあ、オレ。

「これは北郷殿。華雄はどうなりましたか？」

「うん、力を貸してくれぬつてや。ところで桃香はいるかな？」

「はい、連れ致しまよつ」

愛紗に先導されて天幕の中へ。桃香は……のほほんとしてる。あ、いつもか。

「あ、一刀さん！……今何か失礼なことを考えなかつた？」

「ソンナコトナイヨ」

やはり女性の勘は怖い……

「なんか怪しいけど……とりあえず兵馬と兵糧ありがとうござりました 貰つた塩と味噌は売つたんだけど……平原の城がちょっと酷くて改修に使つちゃつたんだ。あはは……」

兵士1万人が1年暮らせる額を渡したはずだつたんだけど……しかも桃香が幽州を去つた時には兵士5000人だつたから単純計算で2年持つし。

どんだけ酷かつたんだろう。

「本当は少し余つたんだけど……街や村の人の生活が目も当てられなくて」

……ま、桃香たちらしいか。

「いいよ。愛紗に華雄を捕らえてきて貰つたんだ、お釣をあげてもいいくらい。ということでの戦で窮屈しそうな桃香をもう少しつとだけ支援してあげよう」

華雄と華雄の武は当然お金の価値では表せない。けれど彼女の今後、それが無駄ではなかつたとわかる時がきつとくるはずだ。

「一刀さん大好き！」

うん、柔らかい……

「！」ほんっ

愛紗がいたのを忘れてたつ！

「あ、あはは……愛紗ちゃん、顔が怖いよ？」

「そのようなことなどありませんっ！」

「いやこや愛紗、眉間にシワが寄つてゐるだけ。美人が無しだよっ。」

「び、美人などとのよくなー！」

なんで自分の外見のことを理解してない人って多いんだろ？。田  
とか白蓮とかみたく。

いや理解していたりして、男を手玉にとつて怖いけど。  
星とかわ。

「本人が思つてなくとも周りが思つてゐるのさ」

「いや、その……いえ、ありがと」「やれこまく」

うふうふ、わかつてもうえて何よつと。

「そういえば桃香、星は？」

「星ちゃんなら鈴々ちゃんと手合わせしてゐよ 鈴々ちゃんも

星ちゃんも出番が無くて持て余してゐみたい

仮面の話……はいいか。

「ん、わかつた。適当に戻つてくるよ」おこでくれぬ？

「うん、了解しました」

「じゃ、これで失礼するよ……つと、忘れてた

桃香に近づき耳打ちする。

「洛陽に入つたら董卓と賈駆の保護を最優先でお願い」

愛紗にも同様に。

「やはり、ですか？」

「そうみたい。んじゃそういうことでもまたね」

次の相手は泗水闘を退いた張遼と呂布。

張遼を薄情だとは思わない。華雄が打つて出た時に勝敗は決まつていたんだ、守つてもしようがないだろう。

しかし神速と一騎当千か……厳しい戦いになりそうだ。

## 第8話 反董卓連合・破軍・続（前書き）

ついに虎牢関決戦の日を迎えた連合軍。

果たして一刀たちは董卓・賈駆を助け出すことが出来るのだろうか。

## 第8話 反董卓連合・破軍・続

虎牢関。

泗水関を攻略し、ついにたどり着いたのだが……

「またかよ……」

「「」めんね、一刀也ん」

「いや今のは桃香じやなくて袁紹にだよ」

泗水関での活躍を評価（といつ名の嫉妬）された再び桃香たちが先鋒を任せられていた。

「ちうらとしては華雄の件もあるし食糧・兵馬ともに貸すことには躊躇いは無い。」

食糧に関しては多めに持つてきていだし、いざとこいつときの保存食も用意してある。

幽州でも人気のあつた桃香のもとで戦つなら兵も不平不満は言わないだろう。

しかし問題はそこじゃない。

「なんで袁紹が

そつ、何を思ったか先鋒の桃香たち後ろには袁紹軍が控えていた。

大方桃香たちに戦わせてその隙に洛陽一番乗りを狙つてゐるんだらうが。

当然の如く曹操・馬超・孫策・白蓮は反発。

董卓軍には援軍が無いため、いつまでも城に籠つてゐることも出来ずいつかは打つて出てくる。演義では劉備・关羽・張飛を相手にひけをとらない闘いを演じた飛将軍に袁紹軍で勝てるとも思わない。そこに張遼が加わるなら尚更だ。

本人は数の力で問題無いみたいなことを言つていて……確かに戦において敵軍よりも多くの兵数を揃えるのが常道ではある。しかも今回は攻城戦であり、兵数が5倍近い差の連合と董卓軍間においてそれは間違いではない。

ただ。

元は農民の者たちが多くたとはいえ黄巾賊3万を1人で殺したと言われている呂布相手にそれは正しい選択なのだろうか。

休憩中に愛紗に聞いたところ、正直言つて華とはほぼ五分五分だったらしい……華雄が挑発に乗らなければ。

その華をして歯が立たないと言わせる呂布の武力は相当なものだということが窺える。

「愛紗、武人として一騎打ちをしたいかも知れないが、今回は自重してくれ。鈴々も星も闘いたくてウズウズしてゐるから3人で頼む」

「……仕方ありませんね」

「夙、愛紗たちの加勢に行くかは臨機応変に頼むな」

「はい、隊長！」

「うむ、良い返事だ。あとでいい子いい子してあげよう。流石に頼りになる。それと帰つたら犬耳をつけて可愛がつてあげよう。

「真桜は攻城戦まで待つててくれな」

「はいな。くう……やつとウチの出番があ……たいちよに『』」

「なつ 井、 真愛!!」

「なんせ、正は欲しく

「沙和也『デラ瓈美』貢えるやうに頑張るの!!」

「沙和までつ！？」

あの……勝手に話を進めないでいただきたい。

「隊長！ 私も頑張りますから！」

真っ直ぐな瞳がこちらに向けられる。オレの意思は無視ですか。

「い、いや落ち着け凪。沙和、訓練の成果を見せてもらうからね」「はいなの！ 最近は沙和が何か言う度に一部でやる気が上がつ

……いのちの兵の性癖を考慮して沙和隊に配属すれば死兵レベルに

なるのでは無いだろ？

いや死なせるつもりは無いけどさ。

嵐には眞面目で努力家、向上心がある兵を。

真桜には白蓮もしくは一芸で秀でてこる兵を。

騎馬は白蓮だし。

星は……まあ余つたのでいいや。

「んうつ……！？」  
「どうかしたのか？」  
「いや何か不愉快なことを言われたような気がしてな……」  
「ふーん……そんなことより早く続きをするのだー。」  
「あ、ああ……」

「白蓮、張遼は神速、呂布は飛將軍と呼ばれるべりに騎馬の扱いに慣れている

『』術の腕、騎馬の扱い……それなりを含めて『飛』と呼ばれるのだ  
らつ。

「そうか……」

「でも白蓮なら負けない。勝つことは難しいかも知れないけど、  
白蓮の腕があればきっと負けることはなによ」

公孫賛・劉備軍の主要な武将が呂布を相手にしなければならない  
今回、呂布と張遼の取り巻きを相手する役割が重要になってくる。

真桜と沙和は基本的に

馬には乗れるが

歩兵だから白

蓮しかいない。

主君に危ない橋を渡らせたくないんだが……

「……ああ。一刀にそう言わると心強いよ」

「それなら良かつた、かな。明日オレは別動隊を率いるから白蓮の傍にはいられないけど、お互に幽州に笑顔で帰れるよう頑張ろつな」

「そうだな。まだまだやることは沢山ある」

「コツン、と拳を合わせる。

そして、明日へ向けて身体を休めるのだった。

決戦当日の朝、白蓮の天幕には隊長格が揃っていた。

「編成は離里の言つた通りだ。そして今回は私も出るが……みんな生きて帰つてくれ」

「「「応ー」」

白蓮の言葉を聞き、それぞれが持ち場に向かう中、最後に出ていく当の白蓮が天幕の入り口でこちらを振り返った。

「一刀、行く前にお願いがあるんだ

「へうつ……！」コイツは化け物かッ

戦いは均衡していた。

畠布には愛紗・鈴々・星が立ち向かうが、決定的な一打が入らない。

加えて畠布の隊は一人一人が並々ならぬ武を持ち、畠が加勢に行こうとするのを妨げていた。

「はああつ！ ふうつ……沙和、そつちは大丈夫か！」

「まだまだ大丈夫なの！ ロラルのウジ虫ビモ～！ へばつてないでウジ虫はウジ虫なりに働くのつ……！」

「」「おおおつー」「」

若干名恍惚とした表情をしていることは触れるべきではないだらう。

「隊長……急いでくだせー」

そしてその頃、白蓮は張遼隊と剣を交えていた。

「白馬長史の名は伊達じやないぞつー」

「太守様に遅れをとるなー。」「おおおおおおおおーー。」「

「くつ……いへり白馬義従が相手や言つてもこなこな強さとじま

……！」

「お前が張遼か！　白馬長史、公孫贊が相手になつてやる。」

「アンタが公孫贊か……ええやう、一騎打ちや！」

相手に向かつて馬を駆け出せる。

一閃。

「やるなあ！」「そつち！」

馬首をかえし、また一閃。

「ふつ……！」「はあつ！」

（時間を稼ぐだけのつもりだったが……心が、身体が、軽い！  
いける、いけるぞっ！）

一合、二合、三合。

「得物の長さに差があるつちゅうに互角やと！？　こんな強いなんて聞いとらへんで！」

「私はみんなと、一刀と一緒に幽州に帰るつて決めたんだ！  
たあつー！」

白蓮の剣は空を切ったかのように見えた。が……

ツウ……

張遼の頬からは一筋の血が流れ落ちていた。

「はつ、おもろくなつてきたやんけ！」

張遼が再び氣合いを入れ直すと同時に、無情にも銅鑼の音が鳴り響く。

「まさか恋が……！？　くつ……この勝負、預けたる！」

隙を見て張遼は脱出、張遼隊も彼女の後を追い、去っていく。

「太守様！　追撃は！」

「追わなくていい！　隊列を立て直してこっちも下がるぞー。」

「はっ！」

「……はははっ、やつた……やつたぞ一刀お！」

呂布への加勢を防ぐために張遼を足止めする。

白蓮はその任に對し十分すぎる程の成果をあげたのだった。

時は少し遡る。

呂布対愛紗・鈴々・星の戦いは未だ決着がつかず、しかし、確實に呂布の体力を削っていた。

個々が武を持つ呂布隊も数には勝てず、少しづつ、少しづつその数を減らしていく。

と、そこへ。

「今や！　李典隊、駆け抜けてぶちかませッ！」

北郷隊に周囲を護衛させ、戦場を駆け抜けて行く。

「衝車設置完了しました！」

「よつしゃ！『すぺしゃる衝車くん』、いつたれ！」

衝車が門を打った時、大地が震えたよつに感じたのは錯覚だったか。

「もう一発やー、いくでえー！」

「……お前たち、邪魔」

「一刀殿のところへは行かせん！」

「お兄ちゃんたちには指一本触れさせないのだ！」

「主からの命ゆえ、通させんよ」

3人と対峙しながらも城門に意識がいったその一瞬だった。

「今ですー！」

朱里の命図とともに呂布の身に縄がかけられる。

「つーつー……卑怯」

「「めんなさい、呂布さん……でも、董卓さんたちを保護するには洛陽に一番乗りするしかないんです」

ですから、貴方との戦いができる限り早く終わらせなければいけない

かつたんですね、と朱里は言ひ。

「我々だって納得いかんのだから我慢してくれ

将を失つた呂布隊は虎牢関内に戻ろうとするが、白蓮がそれを許さない。

「おつとこには通さないぞ？ 逃げ道は無い、武器を捨てておとなしく投降しろ！」

白馬義徒の名を、そして実力を知つてゐる呂布隊は、地面に武器を置いて帰順したのだった。

「うらあー！」

ガゴオオオノン……！

真桜改良の衝車による一撃目に耐えることが出来ず。天地を搖るがすような振動と大きな音を立て、門が崩れ落ちていぐ。

「よし、これで騎馬は入つてこれないだろ？！ 凪、真桜、沙和は民の保護優先で董卓たちを手分けして探してくれ！ オレと桃香も捜索だ！」

「はい！」 「任しどきこー！」 「はいなのー！」

「や、桃香。桃香の護衛には馬超さんが、オレには馬岱さんがついてくれるらしい。……必ず助け出せうな」

「うんつ！ 馬超さんよろしくね

「ああ、行け！」

華との約束があるからだけではない。本来悪いのは十常侍であり、董卓たちにはなんの罪もないのである。

だからこそ必ず助け出す。必ず。

「馬鹿さん、オレたちも行こうか。頼んだよ」

「まつかせて」

「手筈通り隊列を整えて入城する。伝えた通り他の軍を通さないよに兵士間を詰めて通路、ギリギリまで広がれ！ 怪しまれない程度に出来る限りゆっくり入るぞー！」

主も随分無茶な命を下すものだ。だが、無茶であつても無理ではない。

「あとほ任せたぞ、主よ

## 第9話 反董卓連合・急章（前書き）

虎牢関を制した一刀たち。

一刀は華との約束を果たすため桃香とともに董卓と賈駆を探しに行く。

果たして結末は。

## 第9話 反董卓連合・急章

「へう……」

董卓を発見したと馬超から内密の知らせを受け、向かつた先にいたのは…

触れてしまつと壊れてしまいそうなくらい華奢で小柄な、そして儂げな美少女だった。

ちなみに桃香を1人には出来ないので馬超はダッシュで来てダッシュで戻つていつたが走るスピードが有り得ないほど速かったのは余談だらう。

「桃香」

「うん、そうだつて」

……そうか。

白蓮から董卓の人柄を聞いてはいた。それに女性だらうといつことも予想していたが…

さすがにこれは……ねえ？

(つてことは隣のメガネつ娘が賣駆?)

桃香に耳打ちする。

(「ん、助けたいって言つたら教えてくれたよ）

「」の娘たちが洛陽で暴虐の限りをつくしたと噂の董卓に賈馳だと  
は誰も思わないだろ？

「ねえ劉備、さつきから話してるけど誰なのよコマツ」

……あつ、召乗るの忘れてた。

「一刀さんは『天の御遣』だよ」

「「イツが？ 確かに光る服なんて見たこと無いけど……」

「オレのこじまことして、無事で良かつたよ。華との約束だから  
うな

「華つて……華雄将軍は生きてるのー？」

はて、華と呼ばれていたと言つていたが……呂布とか張遼みたいな武官側だけなんだろうか。

「うん、彼女の力があれば少しでも多くの民を救つことが出来る  
からね……説得した」

「……奥く出来たわね。とにかく、生きていらねば良かつたわ」

「あの、御遣いさま」

何かを決意したような表情で董卓ちやんに聞い掛けられる。

「何かな？」  
「私の真名は円と言こまゆ」  
「ちよ、ちよつと円ー？」  
「詠ちやんも」  
「……はあ。真名は詠よ。これでいいんでしょ、円？」

「ふふ、と黙つて顔を綻ばせる董卓ちゃんが可愛らしい。

「……えつと、なんで？」

「劉備さんから教えていただきました。私たちのことを助けたいと仰つたのは御遣いさまだと」

桃香も別に言わなくていいのに……面と向かつて言われると恥ずかしいな。

「いや、当然のこととしたまでだよ」

「その『当然のこと』を当然のように出来ることが重要なのよ。巷で噂の『君』である劉備ですらアンタから話を聞くまでその可能性に気付けなかつたんだから」

もつとも、軍師は知つて情報を探り潰したのかもしれないし、それに気付いたとしても何も出来なかつたでしょうね、と賈駆は言う。

確かに今の桃香たちに連合を組むほどの力は無いからな……

「ですから、私たちの真名を受け取つていただけませんか」

「そつか……オレは北郷一刀。よろしくね月、詠」

「へう……」

「ま、これから劉備の下で真名で過ぐさなきやならないわけだしどうせ教えることになつてたわよ。アンタ劉備と仲がいいみたいだし……つてなに刃を誑かしてんのよつー」

「うおつーっ！」

あ、あの男の急所はやめてください……あと数センチで直撃して

たから。

「……詠ちゃん」

「だ、だつて用えー！」

「は、はは……とりあえず円と詠は桃香のところへ行くつてこと  
でいいの？」

「そりよ。劉備たちには恩義があるからね」

董卓・賈駆を助け、華雄・呂布を捕らえた。唯一張遼だけはわからぬが……曹操の軍が何やら動いてたらしくから白蓮の足止めをくらつたあと逃げ延びたか捕まつたんだね。捕まつたなら人材好きな曹操が殺すわけもない。

「御遣いさま。私たちは桃香さんたちの下へ行きますが、それとは別に貴方の下へ行かせたい人がいます……よろしいでしょうか」

「いいよ。あと出来れば名前で呼んでほしいかな」

「へうう……」

「……月に怒られるから今回は蹴らないでおくわ。それとその娘は今、身を隠してゐる。ほとぼりが冷めたころに行かせるけど……それでいいわね？ キツと戦力になるから」

「わかった。ひとあんまり長話もな……じゃあオレはここで失礼するよ」

「うん、またね一刀さん」

早く白蓮のもとに行かねば。

その思ひとともに少し早足で戻るのだった。

「一刀っ！」

「おわっ……」

天幕に戻った瞬間、白蓮が抱きついてくる。

「無事で良かったよ。ケガは無い？ それとなんでそんなに……」

「聞いてくれ一刀！ あのなあのな、張遼と一緒に打ちして傷を負わせたんだ！」

「……一騎打ち？」

「…………え」

「ええー？」

「一刀に、その……抱き締めてもうつたあとからなんだか負ける気がしなくて、それに戦ってる時も身体が軽かったんだ！」

驚いた。張遼は星といい勝負くらいだとつけていた。さらに騎馬戦となれば星の勝ち目は激減する。その相手に無傷で、なおかつ一撃いれてくれるなんて……

「一刀、これが愛の力って言つやつだな！」

興奮状態の白蓮は結構恥ずかしいことを言ったのに気にも留めてない。

「ははは……ところで華は？」

「ん？ あいつなら離里に地理を教わりにいったぞ？」

へえ……放浪する際の行き先の目安をつけるためだらうか。

「ありがと。ちょっと行つてくれるよ」

「うん、じゃあまたあとでな！ 選……くふふ

ニヤニヤしてゐる白蓮をおいて華のもとへ。

「ん、一刀か。上手くいったのか？」

「うん。月と詠、これでわかるよね」

「そうか……これでお前が私にした約束は果たされた。これからは私が約束を果たす番だな」

「離里に地理を教わったのはそのため？」

「ああ。盜賊や貧困にあえいでそうな民がいそうな場所をな

「会わなくていいの？」

「大丈夫、問題ない。いずれ何処かで会いつ」ともあるだらうぞ

「それもそうだな……はい、これ。華蝶仮面のやつ

渡したのは星愛用　　白蓮や離里は気付いてないらしい  
のマスク。

「確かに受け取つた。では私もそろそろ行くが

「もう行くのか……いや、ならこれも渡しておくよ。塩と味噌と  
お金。最初のほうは大変だらうから使ってね」

「む……ありがとう。世話になつたな」

「次に会つ時は平和な世の中であつたらいいな

「そうだな。そのためのお前と私だ。頑張ろ」

「ああ。じゃあな、華」

「またな、一刀」

身を翻し去つて行く。

最後までかつこよかつたな、華。もしオレが女で華が男なら惚れていたかもしね。オレもああいう風になりたいな。

新たな目標を見つけることができたし、今はみんなで幽州に帰ろうか。

反董卓連合解散から早1か月。戦後処理は大変だ。幸い戦死者はいなかつたが重症者がいないわけではない。

兵役をこなすことができない兵に（内）職を斡旋したり、溜まつていた書類　　それでも風や国譲さんたちのおかげで通常の量に2割増しくらいで済んだ　　を片付けたり。

鳥丸はどうだかわからないが、連合参加組との戦はしばらくはなりだろう。

内政もまだまだ発展途上。上下水道の整備や衛生環境の改善などのインフラは、まだ手をつけていないことが多い。

だけど充実している。街の人々の笑顔が見られるのだから。さ、もうひと頑張りするか。

「コンコン、ヒノックの音が響く。ノックに関しては入室の際心得として広めている。

「どうわく

「失礼します」

現れたのは国譲さんだった。

「御遺い様にお会いしたいという方がいらっしゃっています。なんでもこの紹介状をお見せすればわかる、と」

そう言つて一通の手紙を受け取る。

「ん……円と詠からか」

ならば話は一つだな。

「わかつた、今行くから国譲さん、白蓮呼んできてもいいんで？」  
「かしこまりました。……それと手紙をお渡しになつた方は大層可愛らしい女性でしたよ。では失礼します」

若干怒つてる？

まあいい、とつあえず密が先だ。

「君が円と詠の関係者でいいんだよね？」

「そーよ」

可愛らじっこ、けど気の強そうな女の子。

なんとなく曹操を彷彿とさせる印象だ。

「これからお世話になるわ。よへじへね

差し出された手を握り、握手を交わ

「うー」

瞬間、投げられそうになるが踏ん張る。

「……！ へえ……武はからつきし、ってわけでもないのね」

「武に関しては一応鍛えてるし、鍛えられてもいるからね。オレは北郷一刀。『天の御遣い』のほうが有名かな」

鍛えてると言つても恐いくらいは軽々、じつはかなり本気。やはり差が有りすぎる。

「いきなりこんな」とれて怒らないんだ

「試そうとするのも無理はないと黙つからね。それに綺麗な女子には弱いんだよ」

「……変なやつ」

「よく言われるよ。とこりで今前を教えてもらつてもいいかな」「いいわ。少しだけだけあんたのことを認めてあげる。私は

「

やつぱり曹操みたい、と思つたのも一瞬だけ。

なぜなら続く言葉に驚いたから。

「 董白。字は叔穎よ。月姉さまの妹。改めて、ようしくね

史実における董卓の孫娘。彼女はこの世界で、妹として登場したのだった。

実弟の董旻さんマジ涙目だろこれ。

外伝 ～田豫、一刀と出会い～（前書き）

物語を田豫さんの視点から書いたものです。

## 外伝 ～田豫、一刀と出合つ～

「とにかくは。田豫と申します。

……私は誰に向かつて話しかけているのでしょうか。ですがそうしなければならなかつた氣がします。

まあそれは良いとしましょう。

ところで今日、太守さまが1人の男性を拾つ……お連れになりました。

白く輝く服。なんでも『ぼりえする』という素材で出来てるとかなんとか。

時たま出てくる未知の言葉。天の国にいらっしゃつたこのの癖なのでしょうか、無意識に言つてしまつそうです。

ですがその言葉を訂正し、私たちがわかる言葉に言い換えてくれるので大変助かりますし、勉強になります。

書き留めて纏め、出版すれば好事家たちには良い値段で売れるのではないかでしょうか。紙は高級品ですが、それ以上の値段でも大丈夫そうな気がします。

幽州は太守さまのおかげで平和ですが、やはり貧しくもあります。

その収入があれば少しは役に立つでしょうし、ここだけの話私自

身も両親や祖父母への仕送りの額が増やせるのではないかと考えています。

戦や病で近しい人を亡くしたことはありませんが、裏を返せば人數に応じて生活費がかかります。

最近では太守さまに認められ、昇進・昇給がありました。

小さいながらも私室を与えられ、これ以上は高望みといつものでしょう。

そう思っていた時期が私にもありました。

「国譲、一刀……ああ天の御遣いのことな。北郷一刀といつらし  
い。それでなんだが……一刀に政務をしてもらおうと思つてな」

特別手当でも出すからさ、と言われ、迷うことなく返事をしました。勿論了承の意です。

特別手当で田当てとこうよりかは、興味本意といったところでしょうか。

実際に接してみてどのような人柄なのか、天の知識はどうなものなのか。

それに触れてみたかったです。

さて、これから御遣いさまのところへ向かいますが……はたして  
どのような方なのでしょうか。

「失礼します」

「あ、初めまして。北郷一刀です。よろしくお願ひします」

「御遣いさまの読み書きに関してお教えさせていただく田国譲と  
申します。以後お見知りおきを」

爽やかな好青年、という第一印象。しかし私が名乗った時に僅か  
ながら驚いていらっしゃったのは何故でしょう。

「あ、ああ……よろしくお願ひします、国譲さん。あと、御遣い  
さまはやめて貰えませんか？ そんな大層な人間ではないので」

「そういうわけにはいきません。それと私には敬語ではなくて構  
いません」

天からやってきて、太守さまのみならず、あまつさえ趙雲さまに  
まで認められた人物が大層な人間でなかつたら私たちはどうなるの  
でしょうか。

そう私が言うと少し悩んだ末、名前だけは『さん』付けの  
ままですが 敬語ではなく話していただけようになりました。

少し慌てた表情をなさつたのを可愛らしいと思つたのはこじだけ  
の秘密です。

何はともあれ開始した政務。

呑み込みが早く、わからないところはすぐに質問してくださるた

めいじ時代としても教えるべき部分が明確になります。

翌日からも続く政務。やはり凄まじい『すびーど』で口を『ますたー』してしまいます。

私としても教えがいがあるところなのです。

ふと氣付くと御遺言さまがこちいをじつと睨つめています。

「私がどうかしましたか？ も、それが2人きりだからといってそんな……いやん」

ああ、私の故郷には愛しき殿方が……

いませんけど。

「やるなりそれなりじしょ照れてください、お願ひします」

正論ですね。

ですが上手く頬を染めることが出来ませんから、これは課題です。

わらそろ終わつたうになつてしまつた。

御遺言さまは『ふにじつしゅ』に向けて『ペーすあっぷ』していきます。

仕事を早く正確にこなせたのは教えた私としては嬉しいのですが、少し寂しくもあります。

「……よし、終わつたつ…」

「お疲れ様です」

「んじゃこれを」

「はい、確かに」

書類を集め、次は警邏または視察です。残念ながら私はついていけませんので、こつそり御遣いさまを護衛しているらしい趙雲さまに頼んで様子を聞かせてもらいましょう。

趙雲さま曰く子持ちの美人な女性に見とれていたそうで。

なんでしょ、すゞしくハラハラしました。

それよりも御遣いさまと趙雲さまは黄巾による襲撃を受けている村の救援に向かうとかで、すぐに太守さまのもとへ向かっていつてしましました。

怪我などをなさらないか心配ですが私に出来ることはありません。

ただ無事を祈るばかりです……

結果。無事に帰つてきました。

その際に新たな武官候補として3名の女性が御遣い直属の部隊に編入されたそうです。

.....

実直、真面目、堅物。しかし御遣いさまの前では従順な子犬のようにパタパタしてしつぽを振つてゐる……そんな印象の樂進さん。

技術面において纖細さと大胆さを兼ね備え、私からみても少しだけ私も自信があつたりします 羨ましいほどの大きさをもつ李典さん。どこかとはあえて言ひません。

おしゃれに気を配りながらも戦いをこなせる服装を選ぶ『せんす』のある于禁さん。

そこに趙雲をまと太守さまが加わるため……選り取りみどりでいいですね、と御遣いさまに言ひましょつ。決めました。

まだまだ伝えたいことが……いえ、誰に? とは聞かないでください。伝えたいことがあるのですが。

今回はこのへんで失礼しようかと思います。

では、また。

## 第10話 石鹼作り（前書き）

反董卓連合が解散し、幽州へ戻った一行。

戦後処理の仕事が多くあつたが、それすら吹き飛ばす出来事。

それは、董白の加入と疫病の発生であった。

## 第10話 石鹼作り

「 董白。字は叔穎よ。月姉さまの妹。改めて、よろしくね」

董旻さんはあんま有名じやないからいいとして……いやいやいや似てないにも程があるでしょ！ 確かにきめ細かい雪のような肌の白さには素晴らしいものを感じるけど…

「あ。あと月姉さまに手を出したら……どうなるか教えてあげよつか？」

「全力で遠慮します」

曹操と詠を足して2で割つたような人格か……うん、ヤバい。ヤバいやばい。大事なことだから3回言つた。

「……とりあえず名前はどうする？ 変える？」

「必要ないわ。刺客くらいならなんとかなるけどあんまり多いと流石にムリつてだつただけ。今は大丈夫でしょう」

確かに1人なら多勢に無勢だが、うちの軍の相手にわざわざなりにはこないだろ？ てかわざわざ董白が幽州にいると囁くするつもりもないし。

それに董白をこいつちこみしたのは少しでも血が絶える可能性を防ぐためだと思つて間違いないはず。

まあ、桃香たちといるなら月たちとは安全かな……

徐州と幽州の二方面作戦は流石に……いや曹操なら有り得るな。

「とりあえず董白も騎馬主体の戦法でいいのかな」

「そうね……白馬義徳がいいわね。同じ白の字を持つなんて運命的じゃない?」

やめてくれ、白蓮が泣く。

「うちの太守は真名に白が入ってるから駄目だな」

「そうなの? 仕方ないわね。じゃ騎馬ならなんでもいいわ」

「ちなみに実力は?」

「……あんた馬鹿にしてる? こつちは異民族を年がら年中相手にしてんのよ」

「あー、悪かった。んじゃ編成しておくよ。それと部屋はあとで案内させるからまずは顔見せ、な」

幽州軍はこうしてまた騎馬が強化されるのだった。

「疫病による死者多數、か……」

顔見せを兼ねた歓迎会の翌日。新たな問題が漢を襲つていてのを知った。

「幸い幽州では発生していないみたいだけど大陸的に原因を断つのが先だな」

医者が少ないこの時代だ、治療より衛生環境を整えるべきだろ?。

三国志で有名な医者と言えば華陀であるが、未だにその名を聞いていない。

だから出来る限り華陀を頼りにせず解決するしかない。

清潔性を保つには……………石鹼？

相変わらず資金は豊富だからやるだけやってみよう。

～石鹼作り～

石鹼は油汚れを落とせるし、細菌やウイルスにも有効だ。  
空氣中に漂つよつたものには対策が難しいが。

さて。

今回は脂肪酸中和法によつて石鹼作りを行つつもりだ。この方法  
だと皮膚や粘膜にやさしい石鹼が出来る。

脂肪酸。

牛の脂肪部分に水を加えて煮出した固形脂を使用。

アルカリ。

農業用に使つてゐる草木灰はアルカリであるため、量には困らない。

かといつて環境破壊を助長していいというわけではないし、草木

灰に加えワラ灰も用いる。

そして実際に真桜とともにやつてみた。

牛脂を取り出すため、牛を食用にする際に脂肪部分を大量に貯つてくる。

女性が多いこの世界で脂肪部分の大半は廃棄されていたため、肉屋のおっちゃんにも渡りに船だったようで、これを使って衛生環境を改善するというと喜んで差し出してくれた。お金を払っても構わなかつたんだけどね。

そして脂肪部分を巨大な鍋というより釜に入れ、牛脂の抽出を行う。

「独特なおいやなあ……」

「石鹼にするとそのにおいもほとんど無くなるみたいだよ。でも試しに香りつきのとか作つてみてもいいかな」

煮出し、煮出し、煮出し……

乾燥するのを待つため別容器に移しかえて2、3日ほど寝かせる。

「お、固まつとる固まつとる」

草木灰とワラ灰は燃やすだけ。

石鹼を作る前に上下水道を完成させたかったが如何せん中国である、地方とは言えども幽州は広大だ。完成には至らなかつた。

インフラ整備は莫大な金がかかり、幽州はそれをクリア出来る資産を有しているが、人的資源は有限である。

だがしつかり実験してから石鹼の使用の是非を考えよう。

「こなんんでもええ？」

真桜に渡されたのは現代のものと見紛うばかりの出来栄えだった。

「うん、においも見た目も大丈夫。実際使ってみるから食堂に行こうか」

油を手に垂らし水で洗う。が、水は弾かれるばかりだ。そこで石鹼を泡立て、洗う。

「……おお？」

油が取れた。

「おばちゃん、ちょっと皿貸してね」

まだ洗い終えていない皿を借り、、最初はまたもや水濯ぎ。やはり水は弾かれるばかりだ。そこでまた石鹼を布につけて泡立て、皿を擦る。

「……おお！」

取れた。

「やつたぞ真桜、完成だ！」

「連日の徹夜が報われるつてもんやなあ」

しみじみと真桜が話す。

「う、一刻も早く疫病に対応するために真桜は寝る間を惜しんで石鹼作りに勤しんでくれていたのだ。」

失敗が無かつたわけではなく、失敗を人が知らないだけなのである。

「『めんな、こんなこと急に頼んで』

「眞のためなんやろ？ それにウチの努力で多くの命が救われるつちゅうんなら苦労も報われるつてもんや」

「真桜……」

本当に。心から真桜がいて良かつたと感じた。

「あ、でもたいちょ、『然』『褒美』はくれるんやろ？」

「……へつ？」

「わかつとるくせにこのつ、『うづくま』 それと連合の時のも

忘れたとは言わせへんよ？」

「は、はは……」

……つひ、干からびるつ！？ 侍女の眞の間に頼んでおひり……

干からびてたらお湯を口から注いで3分後待ってください、と。

一刀と真桜の努力が実を結んだ。石鹼を贈られた各地の反応を記しておく。

(曹操)

「公孫賛から贈り物?」

「はい、なんでも疫病対策に役立て欲しいとのことです。生産に関わったのは北郷と李典のようですが」

魏の玉座にて、曹操は荀或からの報告を聞いていた。

「ふうん、それで中身はどのようなもののかしら?」

「石鹼と呼ばれるものが大量に入つておりまして、使用法に関する説明書も同封されていました。」(元)

如何にも興味が絶えないといった様子で曹操は渡された小紙に目を通す。

その興味が疫病対策になるという石鹼に向けられたものか、はたまた真桜、または一刀に向けられたものかは誰にもわからなかつた。

(流琉)

「はい、お呼びでしきが」

曹操は親衛隊のためすぐそばに待機していた典韋を呼びつけた。

「今日の晩餐の後、これに従つてやつてみなさい」

「ええと……ふんふん、わかりました。やってみます。あ、紙はお返しますね」

「そうそう、桂花。これは私たちだけに送られたわけではないわ

よね？

「他には袁姉妹に劉備、西涼方面にも送っていますね。わざわざ全ての送り先を筆記しています」

「争えども民を苦しめるは本意ではない、か……幽州だけで使つていれば疫病に嘆く他国など簡単に落とせるのにねあるいは高値で売りつける、とか。ああ……あの男を私のものにするのが楽しみだわ」

「ううとつとした表情で呟く。

「そんなん！　あのよつた素性不詳の胡散臭い男なんて！　それに噂によると女にだらしない全身精液孕ませ男のよつですしつ！」

「その『素性不詳の胡散臭い男』が民のために様々な革新的政策を打ち出したり石鹼とやらを生産したりしてるのは？　それに、英雄色を好むといつじやない」

私がそうであるようにね……もつとも北郷が英雄にふさわしいかはこれからわかることだけだ。

と曹操は付け足す。

「ふふ、嫉妬かしら？　可愛い娘ね……今宵はイジめぬいてあげるわ」

「ああっ、華琳さまあー！」

今日も魏は百合百合しく、かつ平和であった。

（馬超）

「贈り物？」

「うん、疫病予防にって」

「疫病予防か。だけど母さまはもう病にかかるしな……」

「あ、あと叔母さまを治せるかもしない医者、がいるかもしないって小紙も入つてたよ。お姉さま、どうしようか？」

「北郷はいいやつだつたからな……賭けてみるか。よし、必ず見つけ出すぞ！ ダメだつたらそのときはそのときだ」

「りょーかーい」

（劉備）

「一刀さんから？」

「はい、疫病対策にと」

「わ～これで沢山の人を救えるねっ！」

（袁術）

「贈り物？ はちみつかや？」

「1人1個で孫策さんたちにもちゃんと渡したらはちみつも送るそうですよ」

「本当かえ！ よし七乃、早速手配するのじやー！」

「はいはーい 渡したつてだけ言つておけばいいのこいつすが

（美羽さま）

「ははは、もっと褒めてたもー」

実際には一刀は孫策に確認をいれるため問題は無かつた。

（孫策）

「石鹼、ね」

「ああ。ただでさえ絶対数が少ない我らだ、とてもありがたい」

「一緒にお酒もくれればいいのにー……」

（雪蓮）

「わかったわよ眞琳だからそんな怖い顔しないでっー！？」

（劉璋）

「石鹼？ そんな」とほびりつでもここから酒だ酒ー…

「劉璋さま……はい、ただいまお持ちします……」

（袁紹）

「文ちゃん、石鹼だつてわ」

「北郷のアニキからか……ん？」『文醜さんへ』？ なになに…

…「お！ よーし斗詩ー 風呂行くぞ風呂ー」

「え？ ちよつ……文ちゃん待つ……引っ張らないでー！ 一体何が書いてあつたのー？」

手紙のタイトルは『石鹼を使ったお楽しみ時間の過ごし方』だつ

たそ'うな。

「ちなみに」の時袁紹が先に入つていて大混乱となるのは余談である。

「お」「一さんおに」「一さん、各國から感謝状が届いているのですよー」

「悪いね風、国譲わん」

「いえ、とんでもない」

相変わらず表情に変化のない田豫さんだが、最近僅かな変化をわかるようになった。

確實に今、ほんの少しだが微笑んでいるはずだ。

「北郷さま、未だに距離を感じますので、今後は楓「かえで」とお呼びください。我が真名にござります」

「うへん……オレのことを名前で呼んでくれたらね」

「楓」に対してオレだけ「北郷さま」なんて嫌だし。

「これで国譲さんともっと仲良くなれるかな……」

なんて考えていたら。

「では今後は『主人様』とお呼びしましょ」

「……は

返答が斜め上過ぎた。

「本気?」

「はい」

「…………はあ。ならそれで。よろしくね楓」

「はい、よろしくお願ひします」

「おじーさんおこーさん、手紙をずっと持つてゐる風は疲れたので  
すよー」

「『めぐら』めん……って重くないだろこれ。まあ、悪かったよ

風の頭を撫でてやる。

「……主人様、私にはしていただけないのですか?」

そう言わされたので逆の手で楓も撫でてやる。

部屋の前で手紙を持つ2人を両手で撫でるオレ。

……シユールだ。

「何やつてんのあんた」

「白ちゃんにはおじーさんの手は渡しませんよー?」

「別にこりゃないわよ」

「そう言つてしまつたことをござれは後悔しますよ?」

「はいはい」ちやうさつとも

じゃね、と手をひらひら振りながら董白は遠ざかっていった。

そのままオレは2人を撫で続けていたのだった。

## 第1-1話 幽州防衛戦（前書き）

石鹼を各国へ送り、各地での疫病発生率は大幅に低下。

幽州は他各地に恩を売る成功したのだが……？

## 第11話 幽州防衛戦

第11話 幽州防衛戦

さて。

オレは今、何をしてるのでしょうか。

わかつたら金一封をあげよう。嘘です!「めんなさい。

正解は……

「たこじょ、おこしてくで?」

荷物持ち、である。

「ちよつ、ま、真桜」

「これくらいでへばつとんの? だらしないなあ

「いや、この量はどうかと……」

両腕に抱え、顎と首元で挟み、頭に乗せ……そんな状況である。もつと褒めてくれてもいいんじゃないかな……クスン。

しかもその全てが。

「プラモかよ……」

「プラモで何なん?」

「からくり人形のこと。オレのいた時代では木じゃなくプラスチックってこうやつとかだったけど

プラモはあんまり詳しくない。手先が不器用だつたからね。

「ほお……なんかええなあそれ。いつかたいちょの故郷に行ってみたいわ」

故郷、か。

家族、及川、不動先輩に剣道部のみんな…元気にしてるかな。

「……たいちょは帰りたいん？　自分の故郷、……家に」

「いや……オレの家はここだよ。愛する人も愛してくれる人たちもいる、それにまだまだやりたいことは沢山あるんだ」

「そか。……たいちょ、次行くで次つ！」

「え、まだ行くのつー？」

「あつたりまえやん」

「ヒヒ、と笑い再び歩き出す真桜についていく。気を使わせちゃつたか。

「まつたく……」

はあ、おいていかれないようにしないとな。

一昨日はたつぷりと絞られ、昨日はプラモ以外のものを背負われ、またたつぷりと絞られた。

し、死ぬ……

しかしそんな弱音を吐いている場合ではなかつた。

「『袁紹に動きあり』か」

密偵によると袁紹軍では幽州への侵攻を狙つてゐるらしい。

「ふむ……恩知らずとはこのことか」

「麗羽のやつ……」

星の言葉は遠からずと言つたといふ。白蓮は呆れ果ててゐる。

「石鹼に恩を売る意図はまったく無かつたとは言い切れないけど……それが主目的ではなかつたよ」

争いはないほうがいいからね。

「それにしても性急ですねー。まあ大体理由はわかりますけど」「大方反董卓連合でほとんどの戦功をうちに奪われたというのが理由だと思いましゅ。……ます」

最近離里は歎むと言つ直すようになった。成長なのか?

「それに石鹼のことを上回るほどの大義を見つけたのでしょうかねー。離里ちゃんはわかりますよね?」

「はい。石鹼がうちからのものだと袁紹領の民の皆さんは知られていないと私は思います。が、袁紹さんがそんなこと出来る、するとは思われていないのでそこは「ちの功になつていてるでしょう。未知なものはすべて『御遣い』に帰結しますから」

そうか、とりあえず珍しいのは天の物だと。

「それで大義とは何なんだ、離里」

白蓮、それは太守としてどうだらう。オレでもわかるよ。

「主……これが白蓮殿なのですから、そんな可哀想なものを見る目を向けないでやつてくれませぬか」

星は相変わらず容赦ないなあ。

「な、なんだよみんなわかるのか！？」

「はい」「はい」「当然ですね」「うん」

離里・風・星・オレである。

「ええつー？」

「……反董卓連合はなんのために組まれたんだっけ？」

「ええと……洛陽で悪政を行っていたから？ 結局は眞実ではなかつたわけだけど」

「それで、董卓はどこへ？」

「桃香たちのところだろ？」

いや、こじで気付こうつよ。

「……で、最近うちにきたのは

「董卓だなあ。……………ああー」

「「「はあ…………」「」」

「正直すみませんでした……」

「どこから董卓の情報が伝わったのかは知らないが、つまり董卓の妹がいることを理由に攻め入ると。」

洛陽の住民は月の無実を知っているが、他国の領民は董卓の悪政を信じているはず。

妹がいれば二の舞にならしかねないという大義名分だらう。

「うちは籠城戦は余裕でいけるし野戦でも騎馬無双。凧・真桜・沙和がいるから歩兵もよし。問題は弓なんだよなあ……」

太史慈・沙摩柯・黃忠などがいいところか。黃蓋は吳の宿将だからいるだろうし、夏侯淵は曹操のもとにいた。仲間にするなら後に加わった人が狙い目だろうか。

「」の扱いに長けた将がいるとだいぶ違つものである。

「無い物ねだりしても仕方ないですぞ」

星の言つ通りだ、現状の戦力で考えよう。

「守るか攻めるか。どうする？」

「だいぶ幽州も落ち着きましたし、攻めるのがよろしいかとー」

「賛成です。騎兵たちも暇をもてあましていますから」

「だつてさ。最終決定権は大将だよ、白蓮」

「……よし、出よう。私自身麗羽にはいろいろあるからな」

若干黒いオーラを放つ白蓮によつて、反撃することに決定したのだつた。

総大将	公孫贊
総参謀	程曼
前軍	董白・北郷
中軍	公孫贊
左翼	樂進・于禁
右翼	趙雲
後軍	李典
「それにしていいわね」の騎兵。涼州のにも劣らない。	
新参として実力を示すために董白は前軍に配置されていた。	
「鎧があるから今は騎兵の数・質ともに上げる時間がたっぷりあるんだよ」	
「そろそろだな」「そうね」	
なんたって長所だからな。	

「鎧もあんたが作つたんでしょ？」一回その頭をかちわって中を見てみたいわね」

「……〔冗談に聞こえない」

笑顔で得物に手をかけるなつ！

なんて雑談をしていると。

「……来たわよ」

袁紹軍との戦いが始まった。

「な、なんなんですかこの有り様はー!?」

「北郷のアーキたちつえーなー」

「感心してゐる場合じやないでしょ……」

開戦から半日も経たず、戦況は幽州軍の優位が確定。

というか袁紹軍は指揮系統が分断され、騎兵で追い回され、回り込まれ……10万と号した兵は散り散りになつた。

袁紹軍にも騎兵はいたのだが兵の練度は足下にも及ばず、主を失つた馬たちは幽州軍にまんまと確保されていく。

すでに戦局は決していた。

「姫、退かないと不味いですよー！」

「……し、仕方ありませんわね、今日のといふはこれで勘弁して

あげますわ。オーッホツ『失礼します』……ってなんですのいいところで！」

「あ、いえその……と、とりあえず報告いたします！　曹操軍が袁紹をまの留守を狙い攻めいつたとのこと！　至急帰還せよとのことです！」

「な、なんですって！？　あの金髪クルクル小娘……斗詩さん、殿【 shin-gari】は頼みましたわ！」

お前も金髪クルクルだろ、と伝令の兵士が思つたかは定かではない。

「え？　ちよつと姫！？」  
「斗詩、頑張つてな！」  
「文ちゃんまで……」

頑張れ、斗詩！　負けるな、斗詩！　きっといつか必ず報われるやー

「大勝だな」

じちらの損害は軽微。あちらの被害は甚大。

文句無しの勝利である。

「……」  
「お~い董白？」  
「……いた、袁紹ッ！　あいつのせいで姉さまが……ツ……」  
「お、おい！？　くそつ」

撤退していく袁紹軍を見下ろしていたが、突然董白が馬を駆けさせて行つた。

袁紹・文醜はいいが、顏良が殿だつた時はまずい。

日が浅いとはいえ董白は大事な仲間。

見捨てるわけにはいかない。

「くつ……！」

囮まれた。

董白は窮地に陥つていた。

弓兵に囮まれ、馬を全速力で駆けさせるもその身体には数本矢が刺さり、数多の矢傷を負つている。

「まづつたわね……」

馬を射られ、何とか転倒に巻き込まれて足を挟まれるという事態は避けることができていた。

が、すぐには動けないというのが現状である。

「勝手に先走つた挙げ句にこのザマか……まあ、もともと厄介者みたいなもんだつたし」

死んでも文句は言えないわね。

独りいじかる。

と。

「董白ッ！ 何処だ！」

「えッ……」

何やつてんのあいつ……

しかしこれは好機。

「つ……！」

「そこか！ 今行く！」

力を振り絞り立ち上がる。

「捕まれ！」

当然敵も追撃してきているため、立ち止まって乗馬するなど出来ようもない。

一刀は限界まで身体を倒し、董白を包むように掘む。

「ぐッ……」

一刀は右腕のみで人を支え、董白は右腕との衝突による衝撃を必然的に受ける。

だが、一刀は決して離さない。

「早く、上がって、こいつ！ 右腕だけじやつ……」

「失礼、ね、そん……なに重く……ない、わよ」

「喋らないでじつとしてる。今、馬にくくりつけるから……」

手綱は放すことになる。乗馬の経験が浅い一刀なら落馬していたかも知れないが、鎧のため何とか身体のバランスを保っていた。

だが。

「よし……ぐあつ！？」

周囲への警戒を疎かにした報いか、弓兵に射掛けられていた。

さらに手綱を握つていなかつたこともあり、落馬は免れなかつた。

「ひょつ……」

董白は引き返すために無理矢理身体を起こしそうとし、

「止まるなッ、考えるなッ、振り向くなッ！ オレは決して死はない！ だから行けエ！！」

一刀は起き上がりながら強く叫ぶ。

元凶たる董白に「そんなことが出来るはずもない。必死に止まろう」とする。

しかし。

「辽のへ、止まつなさこよつー」

一刀の馬は主の意志を受け取ったかのよつて董白の言ひつとを聞  
いづとはしなかつた。

(それでいい)

すでにかなりの距離が開いていたが、董白にはやう、聞こえた気が  
がした。

「……つーー！」

最終的に行き先を馬に任せた董白はしっかりと戦線を離脱し、さ  
らに幽州への帰還を果たしたのだつた。

一方、一刀はと声つと。

追つ手を避け林の中へ。木が弓を遮蔽するため、弓兵の力は大幅  
に削られる。

「おいおい……」

行き着いた先は崖の上。対岸は遠く、その間を流れる川までは1  
0メートルほどの高さであつた。

後ろからは追っ手。やるしか、なかつた。

「……南無ニツ一」

川へ跳躍する一刀を追わず、十分に任務を果たしたとして、追っ手は本隊の後を追つていった。

「ゲホッ……はあっ、はあっ、はあ」

随分と流されたか……けど、まだやるいでは沢山ある、ん  
だ……

流れの緩いところで何とか岸に上半身を乗せる。

「帰らなくちや……みんなのもとにつ……」

体力の消耗、矢傷に加えて体温を奪われた一刀に余力は無く。

「あ、れ……？」

その意識を失つた。

「む？ あれは」

あの服には見覚えがあるな。

近寄り、よく見てみると、矢が刺さり水で濡れた服で体温が奪わ  
れているようだ。

「仕方ない」

偵察の帰り道で思いがけないものを拾つたようだ。

幽州の治政を見、戦局の確認も行つていた彼女はそんなことを考  
えながら応急処置を始める。

「……よし」

濡れた服を脱がせ 優男のわりには引き締まつた身体を見て  
感心しつつ 、怪我した部分に愛用の禪を包帯代わりに巻いて  
やつた彼女。

その名を、鈴の甘寧こと甘興霸と言つた

-白龍翔天・第一章・完

## 第12話 オモイノキズナ（前書き）

袁紹軍を散々に打ち破り、勝利の余韻に浸っていた面々に届いた一報。

それは将に限らず兵達をも震撼させた。

早馬が着き、兵を送りつとしていたところに悲報が舞い込む。

曰く、天将　近頃はこう呼ばれる　である一刀が乗つて  
いた馬に満身

創痍の董白が縛り付けられた状態で戻ってきた。

その後ろに一刀の姿は無く……

## 第1-2話 オモイノキズナ

身体が、揺れる。

一定のリズムで腹を圧迫される感じがなんとも心地悪い。

「ううう……」

「……気付いたか」

目を開ければ視界は全て白。

……そつか。オレ……死んだのか。

まだまだやりたいことはあったのになあ。

「何を言つてるか知らんが少し黙つてみ。舌を噛むぞ

ん?

(うわっー)

突然全身に浮遊感。

と思つたら腹部に激しい衝撃が。

(うぶつー?)

再び一定のリズムでオレのお腹が圧迫され、……オエ。

なんとしても叶くまいと悪戦苦闘していたところ、床に転がされる。

「思春、首尾は？」

「それについてですが蓮華様、偵察帰つてのよつなものを拾いました」

その会話とともにオレの視界が開けて……って袋詰めこれで肩に担がれていたのか。

「石鹼なるものを送つてきた北郷です」

「ほう、」これが

見れば孫策さん、ではなく少し小柄なのでそらへ孫権さんか孫尚香さんだろ

うと思われる人が覗き込む

嘔吐感で極限まで蒼白になつたオレの顔を。

「ひょ、ひょつと思春？ 彼、顔色が随分悪いわ……って今にも死にそうよ  
アナタ穏やかな表情で田を閉じぢやダメっ！ え、衛生兵  
？」

叫び声が、窓「こだま」した。

「「うう……」」

記憶が……いやうん、覚えてる。

とりあえず吐き気が酷くて倒れたんだつけ。体力が落ちていたのに加え、矢傷を負つたのが響いたか。

……ん？ 包帯が巻いてある。甘寧さんがやつてくれたのかな。

お礼を言わなくちゃ。ってどこに行けばいいんだろう。

「あ、そこの人ちょっとすみません」

廊下を歩いていた侍女さんに声をかけ行き方を聞く。最後まで連れて行つてくれるらしい。非常に助かります。

「孫権様、客人がお見えになりました」

あれ？ 甘寧さんの所に連れて行つてもらえるように頼んだのに。そう考えていたことを見抜かれたのか、侍女さんが話しかけてくる。

「甘寧様は孫権様の護衛も兼ねていますので、恐らく一緒にいらっしゃるかと。もしいらっしゃらなければ孫権様にお聞き下さい。孫権様がお呼びになればすぐにいらっしゃるでしょ」

それなんて忍者。

そのまま去つていいく侍女わん。えつと……

「あのー、北郷ですが、入つてもいいですか?」

「ああ、かまわないぞ」

中から声が返つてくる。許可を貰えたので、入る。

「包帯を巻いて頂いたお礼を甘寧さんに伝えたいのですが見当たらなくて……」

「そうこういつ」となり。……興霸

「はい

「どこから現れたのか、いや天井からなんだがスッと孫権さんの隣に音もなく降り立つ甘寧さん。

「あ、」の包帯ありがとうございました

「……それは包帯ではなく襷だ。私の予備のな

「え……」

「……キサマ今、何を考えた

「い、いえ、何も！」

一瞬で首筋に曲刀を突きつけられたらしく、ビショーテてしまつのはまつしがないだろう。

「興霸

「はい、申し訳ありません

「ほつ……首筋から冷たい感触が無くなつていいく

「と、とにかく。」の命を救つていただきありがとうございま

す。まだ死ぬわけにはいきませんから」

「仲謀様を始め呉に利益があると考えただけだ」

「そうだな。北郷、石鹼のことも含め貴方の人柄を信じ、助力を乞いたいと思つ」「うう」「  
「助力……袁術の下からの独立、孫呉の再興。そんなところですか」

まあ、史実ですからテンプレですよね。

「……………そうだ。各地に同朋が散らばっているうえ、資金力もない。それをどうやって解決しようか、天の知識を借りようかと思つてな」「兵数についてはオレがどうにかできることではないですから、資金面でお手伝いしましょう。命を救つていただいたことに比べれば軽いものです」

そう、自惚れかもしれないがオレの知識を使って沢山の人を救えるという可能性がある。だから、絶対死にたくなかつた。製塩方法、あとは蜂蜜もどきの作り方を伝えれば十分に資金を得られるはず。

「袁術に売るための蜂蜜もどきの作り方と、製塩方法をお教えしますようか」

荊州、袁術領内。主である袁術と張勲は玉座にいた。

「美羽様、孫策さんが蜂蜜を持ってきたそうですよ

「なに、蜂蜜じゃと！ そ、それで蜂蜜は何処にあるのじや！」

「孫策さんが持つてきますから、もう少々お待ちください」

「孫策め……妾を待たせるとは何事じや」

「うう」

大の蜂蜜好きの袁術。金に糸口は付けず、そのため張勲は金銭面のやり取りに若干苦労しているが、「愛する美羽様のためですからー」と言いながらこなしていた。

「待たせたわね」

「おおー、孫策、早く妾に蜂蜜をよー」すのじゅー。」

孫策から蜂蜜を詰めた壺を貰おうとしたが、ひょいつ、と上に掲げられてかわされる。

「あげないわよ。売りに来たの。最近は兵糧もまともに買えないし、武器は折れるし防具は穴が開いているわ。ということをさすがに戦闘で支障が出ると思つからお金が欲しいのよねー。買ってくれるわよね？ これだけの量があるけど」

「ほんなんに沢山蜂蜜があるのは初めてなのじゃ！ 七乃！ 孫策の言い値で全部買いじゃ！」

「い、言い値で全部ですかー……孫策さん、値段はおいくらいですか」

これよ、と孫策は明細書のようなものを渡す。

(……あれ、適正価格か、それ以下。安いですね。商売観が無いのでしょうか)

まあでも安いに越したことは無いです、と張勲はその場で全額を支払い、蜂蜜をすべて購入した。

(ふふ～ん　あ、よう、ひょつとへりこなりお酒に使つてもばれな  
いわよね)

辺りをきよろきよると見渡しながら酒屋へ入つていへ。店内には  
他に客が一人しかいなかつた。

「おじさん、これちよーだ

」

「何をしているのかな、伯符

ギギギ、と硬直させた首を機械のように後ろへ回す。

「な、なんでめーりんがーじー！？　いや、その、そーー。お母  
様にお供えするための

「御託はいい。帰るべ

「　お酒ええええええええ

店主は孫策の引き摺られる姿を見て涙したといつ。

「はあ……

あの後めーりんにたつぱりと説教されて足がまだ痺れてるわ。

でも、思春も北郷を拾つてくるなんてね。どうせないじつに持  
つてきてもりたいけど……ま、そのうち金があるでしょう。

それよりも製塩方法か。それに蜂蜜「モドキ」。思春が言つにはあれは甜菜「てんさい」という大根を煮詰めて作ったものらしい。

北郷のいた国では蜂蜜や砂糖の代わりになつてゐたそうね。まさか普段食べる大根を煮詰めれば蜂蜜のようなものになるなんてわからぬから早速栽培を拡大したらしいし。

それに味見をさせてもらつたけど蜂蜜とは大差ない味。とは言つても蜂蜜はほんの一掬いしか舐めたことないから甜菜と比べるのは微妙だけど……

でも、大量生産できる野菜から出るアレを蜂蜜と同じ価格で売れたためすごく国庫が潤うんじやないかしら。私のお小遣いも増やしてくれるといいなー。

めーりんは予想外の収穫に久々に笑顔を見せてくれたし、いけるんじやないかしら。祭と二人で交渉してみよーっと

北郷は蓮華のウケも悪くないみたいだし、このままあの口を孕ませてもらえば孫吳は安泰かしら……？

幽州では種馬の異名を持つてゐるらしいしね。

連合の時に見たけど、優男だけど芯がしつかりしている感じだつた。

うーん、いざとなつたら私が北郷の妻に……？

それもありかもしないわね。

うんうん。祭も未だに「見合つ男児がおらん」とか言つて処女だし、めーりんも張り型とかじやなくて生身の男を体験してみるのもいいんじゃないかしら……当然私も。

とにかくまずは独立しないとなー。

なんて言つたつけ……ああそつそつ、公孫贊には後でお礼を言わなくちゃね

時は遡り、一刀が行方不明になり、董白が帰還した後の幽州。

「貴様は、私怨で和を乱して軍紀を破り、主を置いておめおめ帰つてきたと」

これほど怒つた表情は見たことが無い。誰もがそう感じさせる星の表情。

眼下には董白が跪き、頭を垂れていた。

「……はい」

「その返事、しかと受け取った。離里、軍法に照らし合せたら、どうなる」

「……斬首、です」

「決定権はあくまで主の主、白蓮殿だ。如何なさるか。軍法通りに斬るならば某が引導を渡してやるー。」

誰もが董白の斬首刑を確信していた。だが、違つた。

「落ち着け、星。お前が取り乱してどうする」

「取り乱してなど！」

「いいから下がれ。これは命令だ」

「……御意」

白蓮は董白の前に屈み、話しかける。

「私怨、か。もとはと言えば反董卓連合も龐柔……袁紹の私怨だ。  
かといって新参だろうが軍法は絶対」

だが、と白蓮は言葉を繋げる。

「一刀が戻つてくるまで、処罰は保留だ

「……どう、して」

「お前の落ち込みようを見ればな。すでにお前は罪を自覚してる。  
そして一刀が生きて帰つてきてやつと、罪の重さがはつきりとわかるだろ？から。一刀がここ幽州に帰つてくる前に死ぬなんて  
……逃げることは許さない」

それと、最終的に処罰は一刀に一任するから結局は一刀が帰るま  
では何もできないからな。

そうこうして、白蓮は玉座を出していく。

すれ違ひで、星に呟く。

(お前が一の将なんだろ。お前が一刀の生存を信じなくてどうす  
る)

「つ……」

そう、ですか。某に今できる限りとは主の生存を祈る」と。  
そして、帰つて来た時に変わらない某たちの、民たちの姿を見せる  
こと。

一刀の帰還を信じ、将たちの絆は再び強く結び直される。

白蓮も、上に立つ者としての血覚が出てきた。

幽州は、やうにその姿を変えよつとしていた。

ちなみに、その上の一刀は。

「ふえ……ふえっくしゅ。ぐすり、誰か噂でもしてゐるのかな?」

そんなことを言いながら、甜菜、すなわち砂糖大根の栽培に精を  
出し。

「あー 今日もいに仕事したなあ

などと呑氣にたまつていただった。

## 第1-2話 オモイノキズナ（後書き）

全話加筆修正を行いました。

つきましては一話から再び見ていただくと違いが分かるかと思います。  
ます。

表記は統一しましたが、抜けているところもあるかと思いますが  
で、よろしければ「一報ください」。

## 第1-3話 再会と処断（前書き）

行方不明となつた一刀。

幽州ではまだ消息不明であり、人々の心に不安が募る。

だが、皮肉にも一刀の消失が、白蓮に幽州太守としての成長を促すのだった。

一方の一刀と言えば、独立の機を伺つている孫吳陣營の下で矢傷を癒しながら、そして農業でリハビリと貢献をしながら日々を送っていた。

## 第13話 再会と処断

「ふう……」

幽州を離れて早1週間。矢傷も大分癒えてきたし、恩返しのためにもと農業をリハビリを兼ねてやっている。

雨の日は読書で知識を増やしたりと、まさに晴耕雨読の生活を送っている。

だけど、それももうすぐ終わるだろ？

蜂蜜もどき 甜菜で得た資金はそろそろ十分だと思つ。最近は城内がバタバタし始めてきたし、それに雰囲気もピリピリとしたものを感じる。

しかし……袁家にはあどぞれくらいの財産があるのだろ？。うちの州も裕福になつたけど、袁家という括りで資産を足したら足元に及ばない気がする。だって袁術や袁紹個人だけで幽州がギリギリ追い縋るくらいなんだから。

孫吳 今はそう言つべきかはわからない は独立に必要な、加えて復興や炊き出し、様々な整備に使う資金の余裕が出来た。

それですら袁術の資産の一割にも満たないのでないだろうか。

「北郷」

「あ、何？ 興霸さん」

「仲謀様がお呼びだ」

思索に耽っていたところ、興霸さんに声をかけられる。相変わらずいきなりだつたけど、もう慣れた。

「わかつた。今行くよ」

暇な時間を見つけては城を歩き回る。オレを拾つたことが袁術たちにバレないように城外には出られないから、ストレス解消と気分転換の散歩は城内探索になつていた。

見慣れた廊下を辿り、仲謀さんの下へと向かう。

「北郷です。入つても？」

「ああ、入つてくれ」

最初は警戒されていたようだけど、今では大分打ち解けた……と思う。もっとも侍女さんによると、石鹼のおかげで警戒度が少し下がつていたらしいから普段はもっと人を近寄せないオーラが出ているのだろう、興霸さんみたいに、主従つて似るのか……

「……北郷」

「はいっ！？」

ヤバい、声に出てしまつた。

「……？ 何を驚いている。貴方には随分と世話になつた」

「いえ、当然のことをしたまでですか？」

そう。資金とか知識とか……本来ならば秘めておくべき事柄だろうけど、有効活用してくれる人には基本的に弱いんだ、オレは。

桃香だつてそつ。孫県の人たちから、といつても全員に会つたわけではないが」の國を良くしていこうといつ気持ちが感じられる。

「それで呼び出した件だが」

「はい」

「北郷、独立した後の県に来ないか」

「……はい？」

「県はいいところだぞ。気候も温暖だし民の人柄もいい

……ええとこれは引き抜きといつことでいいんでしようか。

そういうえば反董卓連合で孟徳さんからも勧誘されたつけな。

「民が安心して暮らせる世になつたら、いつでも行きますよ

「……そつか、残念だ。ならば思春…」

え。なにこれ「我らの秘密を知つたからこな……」みたいな?

「、殺される

「北郷を幽州まで送り届ける。勿論安全に、だ」

「はつ

わけじやないのかよかつたー！仲謀さんも興、霸さん笑わないから怖いんだよ……話が全部シリアスになる。

「重ねて礼を言おう。多くの命が救われたはずだ。本当にありがとう」

手を取られ、彼女の両手から温かな、そして柔らかな感触が伝わつてくる。

「いじりひそかに世話をなりました、仲謀さん、興霸さん」「蓮華だ」

「え？」

「私の……真名、だ。それともう敬語でなくとも構わない」

「蓮華様が名乗られるのならば。思春だ」

「……あー、じゃ、オレのことも一刀って呼んでほしいな。オレのいたところは姓と名しかないから一刀つてのが真名にあたるみたい」

蓮華さんと思春さん、か。

孫兵を担う人たちの真名を預けてもらえるなんて、光栄の極みだ。

「では、また会おうな……か、一刀」

「うん、またね。蓮華」

別れの挨拶を済ませ、思春さんの後について部屋を出る。思春……さん。うん無理だ。なんか呼び捨てにするのが怖い。でもああ言われたら呼び捨てにするしかないんだろうな……

「一刻後に迎えに来る。それまでに身支度を済ませておけ。清掃関係はこちらでやるから気にするな」

「うん、わかった」

とは言つたものの、持ち物なんて無いため片づける物もない。

結局一刻後を待つ間、読書に勤しんでいた。

読書のあと城を出、幽州に入り、見慣れた景色が視界に広がつていぐ。目先に見えるのは、オレが凪・真桜・沙和の3人と出会った村。今では移り住んだ民たちも増え、賑わいを見せている。

「ここまで来たらもう安全かな」

「ならばここまででよいだろ。蓮華様を悲しませるようなことがあつたら許さん。平和になつたら尋ねるといつた以上、約を違えるなよ。では私は戻る」

振り向いて、元来た道を去つていく思春。

見間違いでないならば。言葉の最後に「またな、一刀」と声には出さないが呟いたような気がして。今度から勇気を持つて思春と呼ぼうと決めるのであつた。

さて……みんなに、会いに行こうか

で。

「あの、みなさん……動けないんですが」

右足には雛里が。左足には風が。右手には真桜が。左手には沙和が。そして背中には星が。

なんで凪がいないのかって？ 警邏中らしい。つまりは。

「真桜と沙和はサボりか」

「ええやんそないなこと！」「してたいちょが帰つて来たんやから警邏なんてどうでもええわ！」

「そりやうなの！ 警邏より隊長のほうが大事なの！」

気持ちは嬉しいが……

「真桜、沙和。サボリで減給な」

「ええ～！」

町の人に万が一のことがあったらどうするんだ。……屁だけでもなんとかなりそうと思つてしまつた。

「お帰り、一刀」

「ただいま……白蓮」

何か白蓮の雰囲気が違つ氣がする。連合の時、白蓮に孟徳さんみたくオーラを放つようになつて欲しいと思つたけど……少し雰囲気が近づいたかな。

「お前ら、一刀を交えての宴は後回しだ。今は一刀に決定権を委ねた事項がある」

白蓮がそう言つと、星は不機嫌そうに。離里はビクッ、っとして。真桜と沙和は気まずそうに顔を背け。風は……いつも通りか。けど、少し眉間にしわが寄つていゐるよつた？

「董白の処遇。それをお前に委ねた。独断での行動は軍法において斬首だ。それを踏まえて、董白に面と向かつて処罰を告げてくれ

ああ、そういうことか。

董白は謹慎でもしてゐるのだろうが、居心地は最悪だったに違いない。

「わかつた」

オレが頷くと白蓮もオレの目をじっと見た後鷹揚に頷き、身を翻して城内へ歩いていく。

「真桜、沙和。警邏に戻れ。星、風、離里はついて来て」

董白の私室へ向かう。部屋の前まで来ると、武装した兵士が2名、扉の前に立っている。

……逃がさないためか？

「董白、入るぞ」

オレが扉を開ける前に星が開けて中に入ってしまう。

「主のご帰還だ」

「…………」

罪人というわけでもなく、私室で謹慎しているならば待遇は牢獄より格段に良い。だが。瞳は輝きを失い綺麗な黒髪からは艶が消え、少し頬がこけている。それに心なしかいつもは自己主張が激しいツインテールも元気がない。

「あ…………」

「主に何か言つことは

星が董白の胸倉を掴んで、吊り上げるよつとして立たす。星のあまりの迫力に、オレは声を出すことが出来ない。

「……さい……なさい」

「言ひ相手は某ではないのだ、主に聞こえるよつて言え」

「……『じめん』……なさい……『じめんなわ』……『じめんなさ』……

自惚れかもしれないが、民のために色々なことをやつてきて、民からも、兵士や文官たちからもそれなりに信頼を勝ち得ていると思つてゐる。その中で、オレの行方不明の原因となつたのが軍紀違反をした新参者だといつならば。

周囲の視線。全てが自分を責めているよつと見えるに違ひなく、生きていることも辛かつたのかもしれない。

自害、または逃亡を謀らなければいけたのは星かな？

「……いいよ、オレは『じつして生きて帰つて来たんだ』

「う……あ……」

董白を優しく抱きしめる。涙、だらつか。オレの右肩に染み渡つていぐ。

「うああああん……」

矢傷が癒えた右腕で、頭をゆづくと撫でる。

彼女が落ち着くまで、じつじつとよつ。

「軍紀では斬首、だつたよね」  
「は、はい……」

警邏から呼び戻した三羽鳥、星、雛里、風、白蓮。董白の私室に集まつた全員が固唾を呑んで俺の言葉を待つていてのを感じる。

「軍紀は絶対。新参者であろうが、違反した以上軍法にのっとる  
だから董白、君には死んでもらう」

「…………うん」

「主、執行は某が

「ただ」

「…………？」

「姉思いの君だ、姉と同じ運命を辿りせてやる」

「…………！」

桃香についていった月、そして詠と同じ道。これで、董白は「死  
んだ」。

甘いと言われるかもしれない、けど。死ぬのは楽。一瞬の痛み、  
苦しみで終わる。

人間なのだから憎しみを持つのは当然。ましてやそれが姉の人生  
を左右するほどの出来事だったのだから。

董白……彼女が戦場に出ることはない、無い。

けど、経験を糧にして伝えていける」とがあるから。

「董白が侍女兼護衛をこなしてくれればみんなの負担も減るだろ  
うしね」

どうしても太守の白蓮やオレは護衛が厳重になる。人数が多いからと言って強者に勝てるわけではなく、オレたちに手練れの刺客が来たとしたら。その不安を、星たちが拭い切れていないのは事実。

幽州には有名武将が少ない。星を頂点に風、真桜、沙和と続いたとしてもそれで終わり。前線から外せない人材なのである。

「私は……朧、よ」

「じゃあ明日から早速働いてもらひつよ。食事睡眠をしつかり摂ること。髪や肌のお手入れもね」

「一刀、お前が出した答えがこれなんだな」

「ああ。これでいいよ、白蓮」

「よし、わかつた」

さつきまで難しい顔をしていた白蓮が一転、晴れ晴れとした表情になる。反面星はまだ納得がいかないような表情をしているが。

「なら明日は祝勝会兼一刀の生還祝いだな」

早速董白……いや、朧の出番だらうか。

明日はメイド服を期待、かな。あ、おつかやんに頼んでた服を取りに行かなきや。

「一刀の部屋は戦前と変わらないからな

「ああ、ありがと」

掃除もしておこしてくれたのかな。

まずは、町の人間に顔を見せに行こうつか

＼おまけ／

「う、うの服を着る？……？」

「君のお姉さんも着てるみたいだよ」

おっしゃさんが広めたらしいけど。アイディアを独占しないでおっしゃんはいい人だよなあ、しかし。

「う……」

「気が進まないなら着なくともいいよ。だけじゃつ一度言つてもいい。君のお姉さんである円ど、詠も、着ていぬよ」

「うう……お、お姉さま……」

背中を向けていると衣擦れの音がしてくる。うのシチコヒーショ  
ンはつ……一

「あ、着た、わよ」

「……おお」

う、これがギャップ萌えか？……

普段気の強い朧がメイド服に身を包み顔を赤らめて田を潤ませな

がら上田づかいで此方を見てくる姿は……すいへ、いいです。すいへ。

「朝起いすとおも容赦しないわよつー。」

……え、オレの侍女なの？ 寝込みを襲われそりだ。性的な意味ではなく。

「ふふん、つかの間の女息を楽しむといいわ」

ノオ  
！？

↙この話は本編とあまり関係ありません

## 第14話 戦乱の予兆（前書き）

幽州に一刀が帰還した。幽州の面々はそれがあたたかく迎える。

しかし、それと同時に董白 脣（おぼろ、董白の真名）の遭遇も決まる。

一刀の下した決断、それは。

脣を姉である円と同じ道 真名を捨て、侍女としていくことに決めたのだつた。

## 第14話 戦乱の予兆

一刀の朝は早い。

ランニングをはじめとする体力づくりや、筋トレ、ランニングなど基礎力を高めるもの。そして、素振りや対人での鍛錬。さらにそれが終わると政務、といふ多忙さだ。

しかし、一刀は朝に弱い。そのため侍女に起こしてもうのが日課となつていて。

ただ。闇を共にした女性がいるときはなぜか侍女の力を借りず自分で起きてその女性を起こさないように静かに出ていく。

これも彼の特殊能力だろうか ナチュラルに女性を口説くことに加えての。

さて。

昨日帰還した一刀の身体を慮つて、幽州の女性陣は闇を共にすることを自重していた。

そのため今日は一人での起床であり。未だに一刀は寝入っている。

と、そこへ一人の侍女が入ってくる。

「……北郷様、朝でござります」

「ん……後、5分……」

「起きてください」

「うひふ……」

まだ起きない。

「起きてください」

ややややと一刃の身体を揺する。

まだ起きない。

「……起きてください」

まだ。起きない。

「……起きあつてんでしょうがー！」

「へぶつー？」

侍女におもいきり頬をビンタされた一刃の意識は覚醒し、よひよひ起きた。

「い、いってえ……」

「やつひと起きないあんたが悪いんでしうが

「あ……朧？ なんで、つてそういうば侍女になつたんだつたな

やう、朧は侍女になつた。“一刃専属の”侍女。

「あなたの専属の侍女よ

「うひ

「あなたの顔は。昨日書つたでしうが

これからも武将クラスのビンタで起<sup>ひ</sup>こられるのか、と一刀はげんなりする。

「……なんでもない」

そのまま一刀は起き上<sup>う</sup>がり、服を着替<sup>か</sup>え始める。

(元気になつたみたいで、良かつた)

「ちよ、何で脱いでんのよ!」

「ん? ああごめん」

普段は脱いだものを侍女がたたむため、脱いだ後は侍女に預けている。そのため一刀は侍女が室内にいるのに慣れてしまっていた。ちなみに着替えを全部やらせるのはいろいろな意味でダメだと一刀が拒否している。

「じゃ、これお願<sup>ね</sup>いね」

「あ、うん」

あまりにも自然な感じに脱いだ服を渡され、臍も素直に頷いてしまう。

「いつてきます

「はい、いつてうつしゃい……つて、あれ? これあたしがたたむの?」

その問い合わせに答える者は誰もいなかつた。

鍛錬を終え、汗を流して再びフランチエスカの制服に着替える。ただ、これは新たに仕立て屋のおっちゃんに仕立ててもらつたもので、本物はいざという時のためにしまつてある。

一刀が増設させたクローゼットにはその他バニー・セーラー・スク水・チアガール・体操服<sup>ブルマ</sup>・メイド服（ロング・ショートスカート両方完備）などなど、いろいろなものが入っているが、それについてはいつか。

「大分政務にも慣れたなあ」

楓（かえで、田豫の真名）の言つてた通りだと、一人心の中で頷く。

しかし、しばらく目の疲れる政務から離れて晴耕雨読を楽しんでいた一刀にとっては大変な作業には変わりなかつた。

「ふう……」

凝り固まつた体をほぐすために伸びをする。

「失礼します」

「あ、はい」

「お茶を、お持ちいたしました」

戸を開けて、私室に朧が入つてくる。お盆にお茶を乗せ、ゆっくりと歩み寄つて

「あつ」

そして茶碗と水差しが飛んで

びちやつ サクッ

「熱痛み！」

お茶が一刀の顔面に、水差しの先（尖つている）が額に刺さった。

「ぐふつ……」

（隕はドジつ娘メイドだつたのか……！）

そんなことを呻きながら一刀は必死に痛みに耐えていた。

実際はお盆の上に重さの異なるものが一つ置いてあるため、給仕が初めての隕にとつてはバランスを取るのが難しく、足元が疎かになってしまつて落ちている本に気付かず躓いてしまつたというわけだ。隕にドジつ娘属性は無い。

「！」、「めん」

「とりあえず水、水！」

火傷を負つた部分がしっかりと冷やして政務と再び向き合つ。

それも終わり、久々の城下町散歩

つまり視察に出かける。

「御遣い様！！」「お帰りなさい！」

「うん、ありがとう」

無事に帰ってきた一刀の姿を一目見ようと、町の人々が集まり、人だかりを形成する。

「愛されてるなあ……」

「女性と一部の男性には性的に、ですか」

「ああ……って星！ そしてなんだ今のは穏な言葉！？」

「なんでもござりんよ」

一刀の耳元で言葉を囁いた星はそのまま一刀の傍に立つ。本来は陰から警護しているのだが、人ごみになるとどうしても刺客の判別が遅れるため傍に来たのだった。

「あれ……」

「どうなさった？」

「いや、いつも会う子連れの綺麗な人がいないと思つてさ。警邏に出るたびにすれ違つてんだけど……」

「なんと。主は街の人妻にまでその食指を……」

「人聞きの悪いこと言つくな」

ま、人ごみは危ないからいいんだろう、と一刀は結論付けて先に進んでいく。

見えてくるのは変わらない街並み、人々の温かい笑顔。いつもの風景が、広がっている。

(帰つて来たんだなあ……)

幽州を離れていたのは一桁に届くかどうかという短い日数。だが、今までの元の世界では決して味わうことのできないであろう濃い体験を短時間にした。そして、広いと思っていた中国。全ての人が裕福な生活をしているわけではないと思っていた。

思つていたのだが、現実で目にした光景……特に袁術領での民の生活はひどかつた。それ故に、一刀は“蜂蜜もどき”を適正価格以下で孫策に売るよう蓮華を通して頼んだのだ。

あまりに高い値段で売るとさらに搾取されるから。ついでに言えば、独立した暁には孫策に民の生活改善を要求している。

「北郷様！」

「どうした」

駆け足で走つてくる兵士に、星が応対する。

「こちらを。では、私はこれにて失礼いたします」

「ああ。文か……主、どうぞ」

「うん、……ははっ」

手紙を一通り眺め、一刀は笑みをこぼす。

「何か良い事でもあつたのですかな」

「孫吳……って言つていいかわからないけど、孫策さんたちが袁術に下剋上、独立。資金も貯まつたからね、この調子ならあとひと月もすれば旧吳領は全部吳領になつてるんじゃないかな」

「いつかはやると思っておりましたが、案外早かつたですね。主の帰還は内部抗争に巻き込まないため、と」

「それもあるけどね。怪我は大分良くなつたし、オレの知りうる知識は教え終わつたし」

「ならば、それより今は曹操と五胡ですな」

「うん……」

歴史を繰り返させないための、一刀。それにおいて五胡に動きがないのが不安。単体で来るか、連合で来るか。

白蓮は特に“異民族”という括りに拘つてゐる訳でもなく、偏見も無く普通に接してゐる。袁紹に五胡との繋がりはあるのか。

「五胡の人は太守がお人よしだから仲良くできると思つんだけどなあ」

「……ククツ、相違ない」

星は心底面白いといった様子で笑う。

太守がお人よしだから部下も、民もお人よしになる。

(ビニ)もそんな人たちならなあ)

頑張るつ。一刀は決意を新たにする。何度目かはわからないが。

陳留、城内の玉座。

一刀が帰還してからひと月が経つていた。

今、魏の重鎮たちが一堂に会している。

「さて……あの男が幽州に戻ったわけだけど」

「はい。加えて軍備もかなり充実してきました。武具、馬、兵糧。何より兵たちの練度は大陸最強を誇るでしょう」

「ふふつ。遂に時が来たわね……」

（劉備を攻めた後に幽州から攻められるのは戦力的に厳しかったから内政と練兵に勤しんだわけだけど）

もうついでしよう。春蘭も鬱憤がたまつていいみたいだし。まずは

と曹操は宣戦布告先を臣下に告げる……

「まずは関羽を手に入れるわ。劉備を手中に收めれば裏切りはないでしょ。此処まで戦力を整えれば呂布と関羽でも大丈夫でしょう。桂花、徐州に」

はずだった。

「失礼します！」

「なんだ！ 今は軍議中であるぞ！」

「は、ですが徐州の劉備が民を引き連れて南下しているようです。民は氣付かれぬように少しずつ移動していたようで……今残っているのは兵のみ。早馬でも追いつくことは不可能かと……」

「……なんですか？」

（徐州領を放棄するつていうの？ 情報が漏れていた？ いいえ、今は先手を打たれたことへの対処を考えるべきね）

思考をすぐさま切り替える。

「それとこのよひつな文が」

「ふむ………やられたわ」

「華琳様、文には何と……？」

「『徐州はあげます。でも民のみんなはどうしてもついていくと聞かないので連れて行きます。劉玄徳』だそうよ。要約すればね。なんでも他に圧政に苦しめられている人々を助けに行くんですって」

一瞬、玉座に沈黙が流れる。

「关羽を逃したのは惜しいけど、徐州が手に入ったから良しとしましよう。关羽はあくまでも保険……頼りにしているわよ、春蘭」

「はいっ！ 華琳様のために必ずや！」

(兎がない州、か……どうしたものかしら)

「とりあえず本口は解散ね」

新たな問題に頭を悩ませれつつ、玉座を後にするのだった。

## 第15話 新たなる（前書き）

一刀が帰還し歓喜に沸く幽州に舞い込んだ報。それは孫吳が独立したというものだった。

ひと月後には各地に散らばっていた同朋の協力もあり、旧吳領を支配下に置く。

まだ地盤が完全には固まつていらない状況で劉備たちを領内に受け入れた吳。なぜ、両者に繋がりがあったのか。

それは、一人の男　　一刀によるものだった。

## 第15話 新たなる

「えっと、ありがとうございます、孫策さん」「一一の一一の、御遣いさんからのお願いだし。それに報酬もらつてるしねー」「報酬?」

「そ。お・せ・け」

楽しそうな孫策・黃蓋ら酒豪とは異なり、“断金”の周瑜は頭を抱えていた。

「お、お酒ですか」

同時に、対価がお酒といつのもどうなのだろうと諸葛亮も考え込んでいた。

「ああ、いいんだ。酒を貰わずとも彼の頼みは聞いていたさ」「だよねえ。御遣いさんの頼みだもん」

一刀の評判は孫吳でも上々のようで、それを知った桃香が頬を膨らませていたのを一刀は知らない。

「では、とりあえず西進させてもらいますね」

「ああ。此方にも体面というものがあるから一応監視は付けさせてもらつわ」

「はい。よろしくお願ひします、周泰さん」

桃香たちの目的は、天然の要塞

蜀を支配下に治め、太守劉

璋の悪政から民を救うこと。

一刀という共通の知人 友人を通して、両者は結ばれる。

「しかし雪蓮、思い切った決断をしたものだな」

「んー、まだ地盤固まってないし蜀からちょっかい出されないと  
も限らないしねー。それに……」

言葉を区切り、雪蓮は愛する妹のいる方向を見つめる。

「それに？」

「蓮華が教えてくれたのよ。御遣いさんみたいな人となら共同統治でもいい、っていうか統一しなくてもいいかな、ってね。確かに一国支配のほうが続くかもしれないけど、過去にはそうじやない王朝もあるわよね。だから賭けてみようかなと思ったのよ、誰にでも優しい……北郷一刀に、ね」

「雪蓮……」

大陸を手中に収めることを目指としていた雪蓮。

袁術配下での苦境、そして一刀との 直接面識は無いが  
交流によって、彼女の考えは変わつていった。

「ふつふーん、見直した？」

「……過去の王朝なんていつ勉強したんだ？ 熱でもあるのか？」

「ぶーぶー！ それくらい知ってるわよ……冥琳私を莫迦にしす  
ぎー！」

その後桃香たちは劉璋の統治下・益州に侵攻。その道中で嚴顥・魏延と言った猛将を下し、地理を知るその一人に道案内を任せてついには益州を支配することとなつた。

その「ひの幽州」といつ。

「西は桃香、南は蓮華たち。後は……」

「曹操だけ、か」

白蓮と一刀は地図に田を落とす。

まだ地盤が不安定な両者ではあるが、確実に敵対することは無いし、むしろ同盟を締結しているとほぼ同様レベルの友好国である。

幽州・孫吳・劉蜀。その全ては基本的に専守防衛で、民が苦しんでいるならばそこを統治下に置くといふスタンスである。

しかしながら。

曹魏だけは、大陸を手中に收め、自らの統治下にすることによつて民の安寧を図るとしている。

そのため青州・徐州を皮切りに西へ克「エン」州・冀州・豫州・并州・司州・雍州・秦州・涼州と長く伸びる形になる魏は、後方の憂いを絶つためにもおそらく最初に幽州に侵攻していくだらうことが予想されていた。

その対策として、近頃は頻繁に軍議が行われていた。

「烏丸や匈奴が怖いんだよなあ……」

「ですね。曹操さんたちと事を構えるにしても国境の警備は怠る  
ことが出来ましょん……せんつ」

少し頬を赤らめながら囁んだ言葉を訂正する離里の頭を撫でてい  
る一刀を見ながら白蓮はいいなーうらやましいなーとか思いながら  
他の將に目を移す。

「主戦力は星・凪・真桜・沙和……曹操軍は夏候姉妹にえーと」  
「張遼さん・許緒さん・典韋さんですねー。白馬義従もいますし  
戦力的には見劣りしないかと思いますが、あつちにも張遼さんがい  
ます。それに將の数が少しばかり足りないですよ」

魏の有名武将は6人で、対する幽州勢は一刀と白蓮を入れてやつ  
と6人という現状。

大勢の決していた袁紹軍戦とは違つて一刀は御旗として気軽に前  
線へ投入できるはずもなく、且つ白蓮は大將である。

「華と朧がいればとは思うけど、無い物ねだりをしてもしょうが  
ない。現有戦力で対処だな」

そう結論付け、解散。一刀は私室へ向かう。

部屋に入つてベッドに寝転び、天井を仰ぐ。

(桃香も蓮華も今は大変な時期だしな。体制が整つまで魏が攻め  
てこなければ一番いいんだろうけど……)

それは無理だよな、と溜め息をこぼす。

「主、入つても？」

「ああうん、いいよ」

星が戸を開けて中へと入り、一刀の横へ腰を下ろす。

「星には頑張つてもらわないとね。張遼は白蓮で、三羽鳥のうち  
凪と真桜は許緒、典韋にあてる事になると思つ。真桜は個人としての武よりは統率型だから無理だし……でもやっぱ星1人に夏候姉妹は荷が重いよなあ」

星ならば夏候惇と対峙させても大丈夫という信頼。だが夏候淵と対峙させることのできる人材が、いない。

あと1人、欲を言えば弓に長けた武将が欲しい。

太史慈、黄忠、沙摩柯。

「思春さんは吳だし、呂布さんは蜀だしな」

どこかに所属しているとは聞かないその3人を思い浮かべる。

「ほう？ 甘寧殿は弓も得意なのですかな？」

「オレの知ってる歴史じゃ有名な話があつてね。その甘寧さんもまた沙摩柯っていう人に射殺されるんだけど」

一刀は知りうる限りの知識 三国志“演義”的話を思い起す。

「でもやつぱ黄忠さんかなー。夏侯淵さんを打ち取つてゐし」

「夏侯淵も一騎打ちに手出しをするほど無粋ではないが、他の将兵が標的にされますからな……やはり対抗馬が必要ですね。ま、それはともかく」

「わ？ つと」

星は身を翻し、一刀を跨いで馬乗りになる。

「戦が始まれば」いつの間にか余裕も無くなりますからな、今のうちは

「たひ

舌舐めずりをする星を見て、

「はは……まあ、それには同感だよ」

一刀は星の頬に手を添え、ゆっくりとその顔を近づけていく。

星も、一刀も口を開じて

「北郷將軍！ よろしこでしようかー！」

「……むう。某はこんなことが良くありますな  
「確かにね」

苦笑いしながら一刀は扉に向かつて返事をする。

「何かな」

「太守様がお呼びです。至急いらっしゃることの仰せでした」

「先程軍議を終えたばかりだというのに白蓮殿はまつたく……」

「わかつた、今行く」

「はつ、では失礼します」

一刀が行くからには星も行くほかない。ぐちぐちと文句を言いながらもしつかりと一刀のあとをついて行く星だった。

「一刀……お前に、お・ま・え・に、用があるそつだ」

少しばかり黒いオーラを発しながら涙目で睨みつけてくる白蓮をひとしきり慰めた後、一刀はその人物と対面する。

「ああ、お久しぶりですね。最近は見かけませんでしたけど、何かあつたんですね？　今日はお子さんもお連れしていいようですか？」

「娘は友人のもとへ預けてきましたわ。友人の求めに応じて少しばかり帰郷していたのですが、そこも落ち着きました。ですのでぜひ、御使い様のお力になりたいと。そうですね……少し時間をいただけますか」

場所は変わつて練兵場。一刀と星は期待に胸を膨らませていた。

「……主、ひょつとすると」

「うん、あるかもしない」

練兵場で、先程の女性の腕前を見ることになつていい  
の。

「では、失礼いたします」

「こちらこそ」

互いに武器は訓練用の先を潰した矢、槍。対峙するのは星である。

「……始めて…」

一刀の合戦とともにすかさず矢を放つ。

(早いつ……それも三連射だと?)

懷に飛び込めさえすれば勝負はつくのだが。迫りくる矢を幾度となく払い落としながら星は近寄る術を考える。

「……こだッ！」

「つ！ くつ…」

流石といふか、速さには自信がある星。喉元に槍を突きつけようとするが

「ちいっ！」

弓本体で打撃を防がれ、すかさず距離を取る。

「星、終わりだ。もう実力はわかつたよ」

「しばしお待ちを、と言いたいところですが。勝敗が目的ではあ

りませんからな、仕方ない」

「では……？」

「うん、貴女の実力はわかつたよ。これから宜しくお願ひします」

実力を見定めた一刀は戦いをやめさせ、女性に手を差し出す。

「わたくしは黄漢升と申します。以後、紫苑とお呼びくださいませ  
『主人様』

誰もが見惚れるような笑みで、彼女は名を告げた。

（子供いるけど若いから太史慈さんかなー出生地も近いからなーと思つたら黄忠さんだとつ！　いやでも日本でも15歳で元服だし5歳前後のお子さんなら20歳くらいでもありつむのか……）

なんというか、幽州に『』を得意とする武将が加入するとともに“色氣”とこう属性が付加された。

そんな他愛もないことを考えていた一刀だった。

## 第15話 新たなる（後書き）

さて……紫苑さんを北郷軍に入れてバランスを取りました。一応伏線は張つておきましたがお気づきになられたでしょうか？ 最初のほうですね。

今後の展開はすでに決めておりますが、如何せん被災地に住んでいるものとして節電もありますし……いかほど進むか、どう

私事になりますが、電気・そして本日から自分の家では出るよくなりました水。当たり前だと思っていたものの有難味を知ることが出来ました。

拙作を読んでくださっている方の中には被災された方もいらっしゃるかと思います。

最新話いつことで、少しでも元気になられた方がいらっしゃれば嬉しいと思します。

また、暫くは更新が滞ることもあるかと思いますが、今後もお付き合いでいただければ幸いです。

それと『太史慈伝』『黄巾十無双（R-18）』の第1話を試験的に掲載してみようかと思いますので、そちらの方もよろしければ。

今回の震災・津波被害で亡くなられた方々の「冥福を祈ることも」、「元気なまの」「健勝をお祈りして、今回のあとがきをさせていただきます。

## 「これから（生存報告包）」

「無沙汰していました。

Hを改めまして、蒼と申します。

地震から始まって新生活が開始し、慣れない生活で時間と体調が安定しませんでした。

考査も終わり長期休業に入りましたので、白龍の推敲（風に関する報告ありがとうございます！）と執筆を再開したいと思います。

執筆感がいまいち戻つておりませんので試し書きをしながらじっくりと感覚を取り戻している最中です。

コーナープロフィールも更新しまして随時リクエストをお受けしています、よろしければどうぞ。

優先は恋姫ひひですのでは安心を。

うだるような暑さですが、心機一転頑張ります！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4119o/>

---

真・恋姫†無双-白龍翔天-

2011年8月8日01時59分発行